

と息ついた。

御門は開かれてあつた。信孝は直ちに馬を下りて門外に岸列伏し「禁裡御警衛仕る」と心に念じ、間近に迫つた火を白眼んだ。京に近い國々から警固の武士も續々かけつけたが、火は遂に鞍馬口の方まで延びてしまつた。

池魚録によると「禁裡炎上、二條御城焼亡、公家武家六十五宇、神社二百二十餘社、寺院九百二十八箇所、塔七つ、町數三千百餘、凡家數十八萬三千餘、土藏八千百餘」とある。

恐ろしい一日一夜が、火と風と雨とに明けた二月朔日、東山の高臺から見渡せば、一面の焼野原、昨日まで殷賑を誇つた美しい京の街は夢と消えて、むごたらしい餘燼が一面に立あがつてゐるばかりである。

要助が、狂氣のやうになつて、火を潜り、煙を避け、群集にもまれて興元寺に辿りついた時には、本堂も庫裡も納所も綺麗に焼け落ちて、禪惠上人の姿を見ることもできなかつた。泉水のほとりの愛撫した朝鮮松も幹ばかりになつてシヨンポリ立つてゐた。

(五) 羅寒の屏風

火に追はれて西に走り東に奔りながらも、群集を掻き分けて、要助は禪惠上人を求めたが、生死のほども分らなかつた。

夜が明けてからも、まだ観念めがつかず、一碗の飯を得る方便^{てきて}とでもないので、空腹のまま加茂川、白河口の方に出て、堂積みになつた家財を、あれやこれやと争ひながら選り分けてゐる人だかりの中に立つた。

火の燃えさかる最中には、命さへ助かれればと、妻子眷族、はぐれて散々にならぬやう、互に勵まし合ひ、安全な場所へと逃げ延びた連中も、少し火が鎮まつて來ると、折角河原に持出しておいた葛籠^{つちかち}、長持、あの中には嫁入の時の小袖があつた、系圖を入れておいた、小判もポロにくるんで藏つておいた、と他人の掠めぬうちにとばかり、血眼になつて探しあるく。

その間に要助は曾て興元寺の壇越であつた寺町の線香屋の手代に逢つた。要助は喜んで早速禪惠上人の消息を尋ねて見たが知つてゐない。

「それよりも丁度幸ひだ、お前さんに一つ無理をいつて頼みたいことがある」

と川の中へ引張つて行かれた。流れがヒタ／＼と押寄せてゐる河原の中に、亂雑に積み重ねた戸障子、襖、屏風、戸棚から疊、柳行李、鏡臺、針箱――。

「何うも物騒で、油断をしてゐると持去られてしまう、人手は足らず、守はできず、困りぬいてゐた。お前さんなら大丈夫。その内俺もいつしよになつて和尚さんを探してあげるから、暫く番をしてゐて下され。今すぐ握飯を持つて来てあげるから」

といふのである。要助は快く引受けて、丈夫さうな挟箱に腰を下し、眠りたくなる目を見張つて、頑張つた。

握飯は届かなかつた。腹の虫がぐうぐう鳴きだしたので、流れの水を手に掬つて存分に呑んだ、冷たいそれは甘露のやうな味であつた。

「あゝ、此所にある、此所にある」

髪を無慘に振り亂した女房が十七八ばかりの男の子と一緒に要助の傍によつて、腰をかけてゐる挟箱に手をかけた。その挟箱には三つ柏の紋がついてゐた。

「ちよつと、若し、この挟箱、貰うて行きます、どいて下さいませ」

「何ぢやとな」と要助は目を剥いた「線香屋の手代にお預り申したのでござりますが」

「線香屋の？——私は小間物屋です。三つ柏の紋所、これは私の里の紋所です、どこに紛れたかと、今朝から探し廻つてをりました」

「はてな、さうお仰やれば、さうでもござりませうが、俺はたしかに寺町の線香屋の手代に番をしてくれるやう頼まれましたので」

「そのやうなことはありません。このどさくさ、誰のものも入り雜つてをります」

否應なしに女房は男の子に手傳はして引摺りかけた。

「これはまた厄體もない。別條はござりますまいが、たとへあなたのものと仰せられても、見も知らぬお方にお渡し申すことはなりません。暫くお待ち下さりませ、その内に、手代衆が戻つて參られませうから」

「いつ戻られるか分りもしないものを、便々待つてはをられませぬ。私のものを私が持つて去ぬのに何不思議がござりませう。お爺さんどいて下され」

因業に女房は、要助を押しつけてしまった。

「あゝ此所にある、此所にある」

またその時、ひとりの屈強な商人體の男が要助の横手に来て、そこに立かけてあつた六曲屏風に手をかけた。

要助は驚たい。

「あゝ、滅相な。これは寺町の線香屋の——」

「ナニ！」商人體の男の聲は尖つてゐた。「線香屋？俺や佛具屋ぢや。第一、この屏風、何が書いてあるか、お前さんは知つてゐまい。臨濟大徳寺三百八十四世義文禪師さまが、ありがたい御經の文句を抜いて、長澤芦雪さまが十六羅漢を描かれた上に、御染筆下された、孫子の代に傳へねばならぬ大切な屏風ぢや。嘘と思ふなら開けて見やうか」

佛具屋は屏風が包んである萌黃の被せ袋の紐を解いてさつと開いた。

そこには歩き出したり笑ひ出したりしさうな羅漢の枯木のやうな姿が見られた。

興元寺に長らく仕へた要助である、羅漢の姿は分つてゐた。

「あゝ成程、私の寺の興元寺にもこれに能う似た襖繪がござりました」

要助の顔は少し弛んだ。

「お前さん、興元寺にゐたのか、それなら尙ほのことだ。この屏風は禪惠和尚の世話で大徳寺さんに書いて貰うた」

「左様でござりまするか」

「大騒ぎで、一所に紛れてゐたのぢや。それにしてもありがたいことだつた。命を取られて

も、この屏風は残しておかねばならなんだ。では持つて行く。室町の佛具屋泰山堂、不審があつたら言ふてござれ、知恩院山内に假宅をこしらへてゐる」

(六) 道元の廻し者

室町の佛具屋泰山堂と名乗る屈強な男がさつさと屏風を擔いで行くと、それを黙つて見てゐた最前の髪ふり亂した女房がソレ見たことかといはぬばかりに、要助の方に詰めよつた。

「あの通りでござりませう。死ぬか生きるかといふ騒ぎ、持出した荷物をさうきつちり固めて置けるものではござりません。こゝには大分大勢さまのものが混つてゐるやうです。持つて行つて異存はござりませぬ。三つ柏の紋所——」

女房は男の子の脊に挟箱をのつけてしまつた。要助はもう争ふて見る氣にならなんだ、本當だらうと思つてしまつた。

握飯は來なかつた。線香屋の手代は何もかも忘れてしまつたと見える。でも頼まれたからは仕方がない。來るまで待たうと、砂の上に腰をおろして、また一ぱい流れの水を手に掬つた。何所まで焼けた。誰が焼け死んだ。土藏の扉を慌てゝ開けて折角助かつてゐるものをまた火

にした。本能寺の本堂の下から狸が火を被つて飛び出し、それが近所の家を焼き歩いた。紫宸殿の上に光りものが見えて供奉の公卿たちの脚元を照らした、清水觀世音の鐘が火の出る前に自鳴した。三十三間堂の佛さまが皆動かれたと、さまざまの噂が要助の耳を飛びくりに掠める。

要助は空腹を抱へて目をばちくり動かしてゐた。

とう／＼二月朔日の日は暮れてしまつた。空は相變らず眞黒に曇つてゐて、時々冷たい時雨が降つてくる。餘燼が赤々と雲に映じて、何とも知れぬ凄しい眺めだ。

家財を胴積みにした河原の喧騒はいつまで経つても鎮まらない。そろ／＼持出した戸障子を圍みにしたり家根に葺いたりして假宅を作り初めたものがある。どこからか一握りづゝの米を配りあるく役人らしいものがあつた。八瀬の里の親類といふのが握飯を詰めた大重箱を擔いで來て、要助の直ぐ後の方に一塊になつてゐる人達に食せかけたりした。

丑三ツ刻、スツカリ睡魔に襲はれて、もう何うにも我慢ができません、このまゝ此所に寝て待たうかと思つた時、線香屋の手代が、主人と一緒に、やつと、あゝやつと、出て來てくれた。要助はホツとした。

『長いこと待たせて済まなんだ。あちらにも此方にも家財が散らばつてゐるので大骨だ。腹も空たであらう、握飯は持つて來た。さあ／＼これをお食つて——』

と喋舌りたてる手代も大分疲れてゐる。『あまり長いので何うなされましたかと心配でなりませんでした。それにお預りしてある品の取合ひができて恐ろしいこととござりました』

と要助の聲は少し慄えてゐた。『さうだらう。イヤ何所でも此所でも、それぢや、賤しいものでな』と主人は一通り闇に透して見て『時に番頭あの羅漢の屏風は大丈夫だらうな』

『大丈夫でござります』

要助は吃驚した。屈強な佛具屋だといふ商人に持つて行かれた屏風のことではないか？

『あの、旦那さま。室町の佛具屋泰山堂だとお仰しやるお方が、羅漢さまの屏風を、俺の家のぢやといふて持つて去なれましたが』

『持つて去なれた？佛具屋に？』

主人と手代は一時に聲を立てた。探つて見ても、成る程、被せ袋に包んだ六曲屏風はない。

「えらいことをしてくれたぞ、お爺さん。それなら、その男は五十そこ／＼の屈強な、目の鋭い脊の高い男ではなかつたか」

「左様、その通りでござります」

「失敗た、彼奴だ。ねえ旦那、彼奴が到頭どさくさ紛れに騙りよつた——道元坊主の廻し者——」

「廻し者？では、やつぱり——」

「イヤ爺さん、お前に小言をいつてはならんが、取返しのかぬ大事なことをしでかしてくれたワイ」

「ほい、ほい。何うも危いと思うて評かうたのでござりますけれども、俺の居りました興元寺の和尚さまに頼んで大徳寺さまに云々とお仰やりますので、ツイ迂かりと……」

「さういふことも奴はよつく知つてをる」

「知恩院の山内に假宅をこしらへてをるから不審があれば出て来いといふことでござりました」

「皆嘘ぢや。したが、誰かゞ持ち去つたものはそれだけだらうな」

「イエ、まだ、三つ柏の紋のついた挾箱も——」

「誰が？矢張りその男が？」

「髪ふり亂した女房衆が」

「ぐるぢや。屏風も屏風だが、あの挾箱を持ち去られては、いよく身代限りになる。手代、愚圖／＼してはをれぬ。今の内なら見つかりもしやうから、一つ探せるだけ探して見やうではないか。爺さん氣の毒ぢやがもう暫く見張りを頼む。誰が何といつても此所の品、決して人手に渡してくれるな。よいか。まだ大切なものがある。禮をするほどに、しつかり頼みましたぞ」

闇の中にあたふたと二人は消えた。

(七) 天 罰 觀 面

砂交りの握飯で腹はできたが、要助はこの夜も眠ることができなかつた。潰れさうになつて寄る上下の脛を指で引張つてジツと堪へた。

夜寒の風が犇々と身に浸む。假初の頼まれごとが、えらいことになつたといふ心配ばかりで、

要助は、「詰らぬ目に逢つた」とは思はなかつた。

ジリ／＼と待遠しい夜が明けた。その間に一度、線香屋の主人と手代は知恩院の方から戻つて来て『何うも分らぬ、上加茂の方かも知れぬ、しつかり頼みますぞ』とそれだけいつて、また北の方へ走つて行つたが、すつかり夜が明け切つても歸つて來なかつた。

四邊を見ると、亂雑に堆高くなつてゐた家財がぼつ／＼減つてゐた。八瀬の里からの大重箱をつゝいてゐた後ろの一團も、何時の間にか消えてゐた。

要助は流れて眠い顔を洗つて、東に向いて日の出を拜した。柏手かしむせ二つ、永年寺勤めをしてゐても柏手を忘れることはなかつた。

『何とかして、あの騙り奴が分つてくれたら』

俯向いて腰を探つたが、どこで落してしまつたか、確かに歸り途の逢坂山ではあつた胴亂の煙草入がなくなつてゐた。

『煙草も服まれぬか』

要助は淋しかつたが、そんなことを思ふのも贅澤だと、あきらめた。

一刻ばかり経つと、また河原はガヤ／＼騒がしくなつてきた。今頃になつて、どこから發見みい

出して來たのか、大きな長持を四人の肩で擔いできたのがある。朱塗の曲縁を頭の上に乗せてくる／＼舞ふてゐる寺男らしいのもやつて來た。四五本の鎗と一挺の鐵砲を大事に抱へてゐる仲間風の男が要助のゐる近頃を二三度廻つてから、何かブツ／＼呟いて四條大橋の方へ河原傳ひによろけて行つた。

『やつこらしよ、あゝ重い』

その時、要助の後で何か知ら大きなものを投げおろしたやうな音がした。振り向いて見ると、町人でなし、武家衆とも見えす、殿上人に仕へてゐるやうな風體でもない、品のいゝ若い男が、所々剥げた漆塗、眞紅の緒綱のかゝつた大きな箱を下に置いて、流れる汗を拭いてゐる。

『大變でござりますなア』

要助は心から大變だらうと思つて聲をかけた。

『重いのでな、弱りました。でもまア此所まで來れば安心ぢや。まだ一箱取つて參らねばならぬ。誰か持つて來てくれゝばよいが、頼みにはなるまい。あの騒ぎではなア』

半分獨言のやうにいつてまた汗を拭いた。それから半刻ばかり、その男は黙つて上手の方を見詰めたまゝ立つてゐたが、急に思案を決めたらしく、要助に向つて、

『お前さん、まだ此所にゐなさるか』

と聞いた。要助は線香屋に張番を頼まれてゐることを手短に話した。

『左様か。では誠に都合がよい、序にこの箱も頼みます。直に戻つて参るから』

若い男は、要助がまだ呑みこみもせぬうちにとん／＼走り出した。

『あゝ、もし、大切なものを——あゝもし、大切な——』

要助はすつかり狼狽してしまつて、また厄介な手違ひの難儀がかゝつたりしてはと思つたから、大急ぎで後を追ふた。

ふと躓いた足許に革財布のやうなものが落ちてゐる。拾ひあげると小判の音がザク／＼する。屹度あの若い衆が落したのだと、周章たものだ、向ふを見たが——その時はもう若い男の姿が、河原に散ばつた人の中に紛れて分らなくなつてしまつてゐた。

預かつたものが氣になるので長追ひもできず、漆塗の木箱と一緒に番をしてをる外はないと、戻つて來た。

間もなく線香屋の主人が手代を連れて來た。ニコ／＼してゐる。

『お爺さん、分つたぞ。天罰靨面、屏風を擔いで鳥邊野に死んでゐた。死骸に取りついてそ

の女房が泣いてゐたので、大事な挾箱も事なく取戻すことができた。大變な心配をかけたが安心してくれ、萬事落着、こんな嬉しいことはない、少いがこれは禮心、また少し落着いて家も出來たら馳走もする』

懐から小判を出して裸のまま、要助の手に渡した。

要助はそんなものを受取るどころではなかつた。家の浮沈にもかゝはる大切な品を騙られて、合はせる顔もないと思つてゐたところである。發見つたのは何よりの仕合せ、何よりの喜び、佛に仕へた冥利とばかり、そのまま押返して、

『ありがたうござります。よくお發見かけ下さいました。若しも出なんだら死んでお詫わびと思ふてゐました』。

涙さへ浮べてゐるのである。線香屋の主人も要助の愚直は知つてゐた。禪惠和尚から笑草のやうにしてしば／＼聞かされたことである。

『ではまア、預つておかう、ちやが——』

といふた時に、見馴れぬ眞紅の緒綱の塗箱が目についた。

『爺さん、これは何うしたのちや』

要助は掻いつまんで話した上、懐から小判の入つた革財布を出して見せた。
 『爺さんはまア、火事場の番人に生れて来たやうぢやな』
 線香屋の主人は手代といつしよに笑つた。要助は笑ひどころではなかつた。

(八) 主知れぬ箱

『この道具、荷物は焼跡に急造した假宅に運んで行くから、お前も一緒に、預かつたものをそのまま持つて来るやうに』と線香屋にいはれたが、要助は背かなかつた。

『この所を去りましては、お尋ねなざる方法もござりますまい。もう暫く待つてをります。露天の夜寒にも馴れてしまひました。お願ひするのはまた一つ二つのお握飯にぎわいを』

『それはいと易いことだが、いつまでもこんな河原に据りこんでゐては風邪を引く。何うしてもゐるといふならこの戸襖三枚だけ置いて行かう』

それで話が決まつて、要助はそのまま残つた。日が暮れて焼跡の假宅に歸る人が多くなつたと見え、河原のざわめきは段々淋しくなつて来た。加茂の流れが石を咬んで、冷たさうな音がしつかり身にしみて来た。

塗箱を預けた若い男は、待てども歸つて来なかつた。線香屋から握飯が届いたので、それを頼張つて残して置いてもらつた戸襖を入の字形に組み合はした下に潜りこみ、石を枕に横になつて見た。

誰か、枕許を通ると、歸つて来たかと起き上る。さうでないので又轉ぶ。

苦しい一夜が明けた。もう餘燼に巻きこまれて死ぬやうなことはなし、假宅さへ建ちかかつてゐるのに不思議なことである、若い男は歸つて来ない。

要助はふと思ひついて、革財布をあけて見た。三十枚あまりの小判がキラ／＼光つてゐる。要助はそれを勿體ないといふ風に頂いた。そして底の方をガサ／＼探してゐると、小さな紙片が出て来て『押小路御幸町薩摩屋金兵衛』と四角な判が押してあるのが目についた。

要助は手が／＼りがついたのでホツとした。重い塗箱をかついで、どこが通りであつたかもまだハッキリ分らぬ街の中を押小路に出た。灰を掻き均して假宅の建築に喧ましい金錘の音である。薩摩屋金兵衛と人に尋ねても容易に分らなかつたが、塗箱の重味に肩がぬけさうになつた時、やつと見つかった。貼紙がしてある。やれ／＼と思つた。

『難儀をいたしました。折角お預りはいたしましたでしたが、取りにお越し下さりませぬので、強

う心配をいたしました。尋ね／＼て、漸々参りましてござります。お調べ下さりませ』
 塗箱を假宅の土間に持ちこんだ。それは何うもと早速聲をかけさうな若い男が三四人もかた
 まつてゐるのに、誰も怪訝な顔をしてジロ／＼見るばかりで、何ともいはない。

要助は門違ひをしたかと不安になつた。

『アノこちらが薩摩屋さまで？』

『薩摩屋ですが』一人が無愛想にいつた。

『お預りいたしましたこの箱と、それから——』

革財布を取り出さうとして懐へ手を入れた時に、この内のどの男だつたかと、要助は氣を落
 着けて、かたまつてゐる人たちの顔を見た。

慌しい一瞬だつたのでシツカリ覚えてゐないが、どれも違つてゐるやうである。

『この塗箱の外に、この革財布、走つてお出になる後に落ちてゐたのを拾ひまして、一緒に
 お預り申してをりました。小判が這入つてございます。お改め下さりませ』

要助は革財布を塗箱の上へのせた。

『あゝ、これは若旦那のぢや』一人が叫ぶと『その財布が——』といつて一人が手に取つ

た。それが若旦那であつた。

『どこでお拾ひなされました』

『この塗箱をお預り申しました、アノ白川口の河原の中で』

『なるほど、さういはれると、あの時人に揉まれて、何か、足に絡んだものがあつたやうに
 思ひました。しかし、塗箱は私に心當りはありませんが』

妙な工合に目をしば叩いたその若旦那は、よく見ると昨日塗箱を預けた人のやうではない。
 昨日の人は武家とも見えす公卿衆のうちの人でもなく、分り憎い風體ではあつたが、こんなに
 商人らしい面はしてゐなかつた。要助は改めて皆の顔をズツと見廻した。

『それでは、塗箱はどちらさまの物でござりませう』

『開けて調べて見やうにも錠前がおりてゐるやうだし、迂濶にそんなこともできまい。困つ
 たものをお預りなされましたな。しかし財布は私のものですから改めてお禮を申します。まこ
 とに些少なから印までに』

と、若旦那は受取つた革財布の中から二枚の小判を出して要助の手に渡さうとした。けれど
 要助は受けなかつた。

そこで相當面倒な押問答が繰返された。愆のない爺だといふやうな顔をして見てゐるものもあるし、頑固なやつだといふやうな顔をして見てゐるものもあつた。

要助は暫く手を拱こまいて考へこんでゐたが『では、一つ御無理なお願ひがござります』とつくばいになつた膝頭を撫で、若旦那をじつと見た。

(九) 御 褒 美

要助が無理な願ひといふのは、この塗箱が當家のものでないとすれば、預けた人は今頃屹度困つてゐるに違ひない。河原に待つても取りに來なかつたので、何か事情のあることと思ふが、預かつた以上何うしても返してあげねばならぬ。興元寺も炎上して、歸るに家はなし、この混雜のなか、殊に不自由な假宅で邪魔になることゝは思ふが、どこかの隅にでも置いて貰つて、預けた人が分るまで、塗箱を擔いで尋ね歩いて見たいといふ話なのである。

若旦那はその律義に感心して快よく泊めることにした。要助はとても喜んだ。

その日は手傳などに暮れて、翌日から要助は曲りかけた脊に、繩切で塗箱を千ヶ寺詣りの佛籠のやうに負ひ、御所の廻りから公家や武家邸のあつたあたり、焼けた二城のお城の界限、上

加茂、下加茂のあたりまで、ゆつくりと歩いて廻つた。預けた人に出會つたら屹度見つけてくれると思つたのである。

一日、二日は徒勞に終つた。薩摩屋の人達は『そんなにまでせんでも』といつて、中には愚直を嗤うものもあつた。けれど要助は眞面目だつた。何うしても渡さねばおかぬと決心してゐた。

三日目、けふは東の方をと、五條坂から清水、祇園の社から知恩院の山内をぬけて黒谷に出た。このあたりは火を免れた代りに避難民で一ぱいだつた。

光明寺の山門の前まで來て、金戒光明の勅額を眺めてゐると、横から『オイ』と呼ぶものがある。見ると五十あまり、嚴めしい面構へをした侍士だ。要助はびつくりして頭をさげた。

『その箱、何れへ持つて參る？』

答めるやうな言葉つきである。要助はオド／＼しながら、あらましの事情を述べた。侍士は俄かに面を和けて、

『左様であつたか、それは何とも氣の毒なことをいたした。萬里小路さまには、誰から誰の手へ渡つて、どこへ參つたか、混雜の中とて少しも消息が分らず困つてお出なされた。その緒

綱、たしかに間違ひはない。よく親切に預け主を探し求めてみてくれた。俺の目にこんなところであつたのはソチの赤心が通じたのぢや』

いつて肩を揺ぶつた。要助は嬉しかつた。

『やれ／＼助かりましてござります。それなら此所でお渡し申しませう』待てよと要助は思つた『ではござりますがお武家さま、大切なお品と存じます。中のお品をこれ／＼とお示しなされて、錠をお開け下さいませれば爺めも安心いたします』

『尤ぢや。俺も中のお品は一々承つてをらぬ。萬里小路さまは、お邸も焼亡いたし、山科勸修寺の別房に御避難になつてをる。御苦勞ぢやが、それへ參つてくれまいか』

『お安いことござります』

『年寄に相當の重荷、これは誰か人足でも頼ますばなるまい』

『何のこれしき、もう三日もかうして歩いてをるのでござります』

『左様か、苦勞をさせたの、世にも珍らしい律義な男、褒美をもらつて遣はずぞ』

『滅相な、さういふことでお探し申してゐたのではござりませぬ』

澁谷越でよち／＼と勸修寺へ着いた時にはもう日が暮れてゐた。

山門を這入つて左にある別房、連れ立つて來た侍士が案内を入れると、小僧、次で八十にも近い老人が出て來た。

『それは何うも奇特なこと……成程……いや一々尤の次第、では左様申上げて、中のお品を記してから、錠を開くことにいたしませう』

やがて小さな紙片に老人は品書をして來た。

『これでよいかの』

蠟燭の火で、侍士は要助の前に紙片を見せた。

『憚りさまながら一寸お讀み下さりませ』

『無筆かの』

『目が悪うござりまして』

『さうか、無理もないワの。では讀むぞ。覚えてゐてくれ。葛屋の香爐一つ、銀の茶碗五つ、一角の獅子の形した墨臺一つ、大小刀七所拵への金物二通り、古鏡三面、古い唐渡りの鏡のことぢや、それから壇道齋が持つてゐた硯一面、金銅佛一軀、金襴の裂地五枚、名香の包み一つ、筭三本……まだあるやうぢやがこれ位でよからうな』

「イヤもう結構でござります。何うぞお開け下さりませ」
老人の渡した鍵で、侍士は緒綱を解いてから錠をあけた。
品は紙片に記されてゐる通りであつた。

暫くそこに待つやうといふことであつたが間もなく白銀五枚に白衣を添へて『これが御褒美、大層なお喜びであらせられる。そちも面目を施したぞ』と例の老人が廣蓋にのせて持つて出た。

要助は、

『左様な御褒美いたゞきましても子もなく家もない孤獨者、粗末になつて勿體ないばかりでござります』

とぢり／＼後退りをして頭を地にすりつけるばかり、何うしても戴かうとはいはなかつた。
侍士も老人も呆れた。

『子もなく家もないと申すが、何所の者ぢや』

要助は身の上のあらましを不調法な口つきで吃りながら述べた。

『一生に一度の江戸見物と、折角草津の先、鏡の里まで参りましたところ、この度の大火事、興元寺さまが心許なく引返して参りましたが、上人のお行方は知れず、加茂の河原で斯様

の始末になりましてござります。この箱さへお返し申せば心残りのこともなし、明日にも矢張り江戸へ参らうかと存じます』

それならばと、老人はかねて萬里小路卿と交りのあつた幕府お抱への儒者柴野栗山へあてて一通の消息を書いた。

『これを持つて参れ。安心をして江戸の町が見物できるやう、詳しく頼みが書いてある。申すまでもなく主人萬里小路さまのお聲が／＼りぢや。道は遠い、日は寒い、年よりのことぢや、氣をつけて参れ』

x

x

x

x

要助はいよ／＼京を思ひ切つた。禪惠上人のことも諦めたし、燒野原になつた京には、老ひさらばうたこの身一つ、もう置所がなくなつてゐる。十七年前、十三で勘當同様にして大阪の親類へ追ひやつた伴の七之助からはその後一度の消息もなく、何うやら博徒仲間に落ちて行つて、そのまゝ行方が知れぬといふ噂を風のたよりに聞きはしたが、親類からは何うしたともいつて來ない。それも奇麗にあきらめ切つてしまふ外はない。もうどこに未練もない。廣い三界が我が家、佛さまに縫つてをれ、それがこの世の極樂と、和尚はしば／＼諭された。見たい

／＼と思ひ暮した大江戸、不思議な縁で、勿體ないお公家さまの手紙を貰うて行く、これほど安心なことはない。足がつゞけば歸りには善光寺さまへお参りして、どこでそのまゝ野垂死なうと構うことはない。

律義一遍の胸は光風霽月、何の曇りもない、晴れ／＼とした安樂境。要助は勸修寺からもうその足で勞れも忘れて、とぼ／＼と暗い夜道を江戸に向つたのであつた。

(一〇) 栗山先生

六兵衛と連立つた時のやうな胡麻の灰、追剥、飯盛女の心配は要助にはもうなかつた。一人旅の心細さは増す筈なのだが、京の火事に飛んで歸つて、五日七日の間にさまざまな苦しみに逢ひそれも神佛の冥護であつたか、どれも事なく收まりがついたので、非常に膽が据つて來た。たゞ一圖に頑張つてをればどんな困難でも征服できる自信が、愚鈍な胸にも萌えてゐた。

果して——随分と氣長な二十日あまりの東海道中、恐ろしい箱根の關所も恙なく越えて、みすばらしい老蒼には胡麻の灰もたかつて來ず、野良犬でも向ふから逃げ吠えをするおかしさに、時には米搗歌の一つも謳ひながら二月の末江戸に着いた。

x x x x x

今の東京帝國大學の前身である昌平黌は湯島坂上(昌平坂)へ、元祿三年七月に忍ヶ岡(上野)から、三代將軍徳川家光の命によつて、弘文院といふ幕府の學問所を移した學校のことであるが、要助が萬里小路まのこうじの消息をもらつてこの昌平黌に柴野栗山先生しばのりっさんを訪ねた時は、先生が儒官として招聘され京都から移住してまだ十日あまりしか経つてゐない時であつた。

栗山先生、名は邦彦、通稱は彦輔、讃岐高松の生れで、阿波公に抱へられて四百石の祿を食んでゐたが、後に京都に出て専ら朱子學を講じ、公家武家の人たちで先生の膝下に教へを乞ふたのも少くなかつた。先生が昌平黌の儒官となつた天明八年には年五十三、非常に意志の強い人で、學問のほかに政治的な才能も多分にあつた。昌平黌のいはゆる林家の學問朱子學を正學と唱へ、他の學派の學問を異學と唱へしめたのも主として栗山先生の力であるといはれてゐる。

先生の住居は學校の近くにあつた。要助が萬里小路家からの消息を差出したのを見て、先生は快く要助を請じ入れ、あらましのことはこの手紙で知つたがといつて更に詳しい話をして見

るやうにといはれた。

要助は飾ることもなく、吃々と話をした。先生は要助の愚直と誠實に興味を感じ、京の大火のあまりにも悲惨なありさまを目に見るやうに知ることができて満足もし、なほ色々と一夜を飽かず語り明した。

その翌日には要助を學校へ連れて行つて、岡田寒泉その他の儒官にも引き合はした。儒官たちは常に講じてゐる自分たちの學說との矛盾などすっかり忘れてしまつて、愚直な天性そのまゝの要助の行爲を心から賞め讃へた。要助はあたりまへのことをしたゞけだのといふやうな顔をして、儒官たちの勿體ぶつた顔をジロ／＼見てゐた。この日も大火の話は長々と續いた。

要助は、何の氣兼ねもなく、栗山先生の宅に置いてもらつて、庭を掃いたり町使ひをしたり、江戸城へ書状を持つて行つたり、小まめに働く傍ら、暇があればどこといふ別段のあてどもなしに、賑かなところを選んで見物をしてゐたが、だん／＼町の様子が分つてくると、京とは違つた面白さもあり、先生の方でも重寶にして、手放しては困る位にまでなつたので、邸内に小さな家を新築して、それを要助の住居にあてるやうにした。

要助は喜んだ。興元寺の和尚の消息が知りたいと、そればかりを苦にして、偶々京から下つ

て来る人があれば、くど／＼と尋ねてゐたが、北山の泉祥寺に本尊とゞもに無事避難してゐるらしいことが、やつと分つて、それならもう俺は江戸の土になつてもよいと、心から安心したやうだつた。

x

x

x

x

x

x

或日先生の宅へ五條坂の黨元六兵衛が訪ねて來た。要助とは、全く思ひも染めぬ邂逅であつた。要助も驚いたが、六兵衛も驚いた。

六兵衛は幕命のためといつて京を出たのであつたが、その實は嘗て幕府の御用商であつた富商の江戸屋善兵衛に招かれて江戸入りをなし、その廣い邸内に黨を築いて、京から職人を呼びよせ、陶土や釉などの材料も引いて、祕密の内に毎日試験をしてゐるのであつた。大老松平定信(後の白河樂翁公)が、世にいふ寛政の改革を斷行して奢侈を禁じた人だけに、これまでの御用商人に對しても、相當厳しい制裁を加へ、幕閣に關係ある向との賄賂行爲なども禁ずるやうな方法を取つたので、御用商人中には、浮沈に關するほどの變革が齎らされた。

江戸屋善兵衛が、六兵衛を招いて邸内に黨を築いたのも、これに對する一のある皮肉な挽回

築であつたのだが、六兵衛はそんな内情はあまり知らずにゐた。將軍家齊公いへなの上覽に供へるためだとのみ聞かされてゐたのと「上覽が済めば茶道に興味をもつた諸大名からこれ／＼の用命があることになつてゐる、こゝに黨を築いてゐることを知つた大名の内には、待ちきれないで、内緒で早く焼上りの品がほしいとせがまれるため、試焼のものをソツと献上して待つてもらつてゐる始末だ」といふやうな話を聞かされたので、敵愾心の強い六兵衛は、他の國の黨元に一泡吹かせたい野望もあり、光榮をも感じて、大火のあとの京都の住居から黨一切、犠牲にする覺悟で、麴町の江戸屋の邸内に閉ぢこもつてゐたのであつた。

(一一) 心境の變化

柴野栗山先生は、大老松平定信の信任を得て儒官になつた人だから、むろん定信の政策を輔けるいろ／＼の獻言もした。少しでも臭ひのする御用商人は多少の不便を忍んでも、奥向から異論が出て、排斥すべきであると主張した。講學の間にも、殊更さういふやうな話を餘計にするので門生の中には大分痛い思ひをするものがあつた。

六兵衛が、先生を昌平坂に訪たのは、京都のある公家邸で、先生に會つてから時々招かれたこともあり、自分が江戸入りをした日と相前後して先生が出府されたことを江戸屋から聞いたので、何となく懐しく、主人に斷つて出かけたのであつたが、出る時江戸屋に「黨のことは決して口外せぬやうに」と止められた。

六兵衛は、その言葉の調子に何か腑に落ちぬことがあるやうに思つたが、誰にも内密といふことは初めから知つてゐたので、軽く「承知いたしました」といつて出た。

栗山先生に會つて見ると、先生も久しぶりだといつて喜んで、そこへ要助をも呼び入れ「共に京を出た二人が偶然こゝで會ふといふのも盡せぬ縁といふものだ」と笑つた。

六兵衛は江州鏡の里で別れて以來の話を、要助に聞いて「これは奇談だ、自分たちのやうな仕事をしてゐるものには、職人氣質として、それ位の間の抜けた剛骨は是非持つてゐなければならぬ」といつた。

栗山先生は、六兵衛の居るところを詳しく聞いたが、六兵衛はその點曖昧なことをいつてしまつた。毎日何をしてゐるのかといふことについても、相當考へて、あやふやなことを言つた。

先生は怪訝らしい顔をしてゐたが、深く追窮もしなかつた。たゞ一言「打ち續く凶作、飢饉、

御時勢は、これまでのやうな贅澤三昧、奢侈淫逸は許されぬ。茶道の風流もだん／＼邪道に向いてゐる。富商の催すお茶の會は大びらにする賄賂の手段であるとも聞いた。黒樂を妙法院宮さまに獻じて六目の印を拜領した名譽を保ち、家業を發展せしめるためには、名工としての苦しみもあらうがよく氣をつけて、御時勢に背かぬやう精進するがよい。名譽を名譽として自分の高名を世に廣めやうと考へたり焦つたりすると飛んでもない俗商人のもてあそび者になる、お前さんの仕事は、さうなり易い性質をもつてゐるから、今日まではよかつたが、これから先が随分危い。老中の御改革についての意見も大分纏まりかけてゐるから、どこまでも慎重に、どこまでも靜かに、製品の上にもみ魂を打ちこんで、その外のことは一切考へぬやうに」としんみり話した。

六兵衛は轟々と胸を打たれた。冷汗三斗の思ひもした。最初は「この腐儒が」といふやうな氣持もあつたが、覇氣に富んだ六兵衛も「御時勢の力」といふこと、「権力者の執る政治の力」といふことが臆氣ながら分つたやうな氣がした。「今直ちに」といふことではないが、素晴らしい速さと壓力とをもつて出現して來さうな一抹の不安も湧いた。

『要助さん、事によつたら、俺は急に京へ歸るかも知れぬが、連立つて出た因縁で、お前さ

んも歸るなら、一緒に道中をしやうぢやないか』といつた。

それは突然な話であつた。今まで栗山先生と話してゐたこと、は丸で聯絡のない、降つて湧いたやうな話であつた。

『要助に今去なれては困るが』と栗山先生は笑つて、『要助も別に身よりとはなし、假宅ばかりの京へ歸るよりも、なつてしまつた江戸の方がよいといつてをるが』

栗山先生の御時勢の話は、二人の、たゞ一圖に眞直に向つてゐた氣持を、急に廻れ右をさせたのであつた。

六兵衛は、江戸屋の邸内の祕密の窯が正しくない品を焼く窯かのやうに思はれ出した。要助はまた要助で、六兵衛が京に歸るといふ突然な言葉から、江戸の土になる一生のあきらめが、心の奥に潜んでゐた「京戀し」の望郷の念に譯もなく打ちひしがれて『では連立つて歸らうかなア』と思ひだした。

『どうだ要助、連立つて歸らうといはれると、矢張り京へ歸つて見やうと思ふか』

栗山先生の聲は穩かだつた。

『ハイ』要助は俯向いて溜息をついた。

『無理もないワの。御役目と思へばこそだが、俺とても、江戸よりは京、京よりは阿波、阿波よりは讃岐の生れ故郷が懐かしい。本當に歸りたいと思ふなら歸つてもよいぞ、その代りに來る時のやうに、程ヶ谷あたりまで行つて、江戸が火事ぢやと、六兵衛さんに別れて、また戻つて來たりせぬやうにの。去年も正月に青山から火が出て、權太原、鮫ヶ橋、千駄ヶ谷あたりまで焼けたといふからの』

栗山先生は冗談までいつた。

『飢饉が続いて、去年のやうに騒ぎがあり、今年のやうに米價が高直になると、星が一つ飛んでも火の玉だと騒ぐ、市中を妖僧が不思議な念佛を唱へてあるく、甘露が降つたといふて雨水を掬うて呑む、疫病が流行る、怪しからぬ草双紙を作つて人の心を惑はす戯作者が出る。お上の心配も一通りでない、江戸に比べれば、丸焼けになつたといふても、京は皇城の地、人氣も落着いてよく、あまりザワ／＼してゐない。その内に幕府から京の富豪を説いて罹災民のお救ひもできる筈だから、六兵衛さんも要助も、京に歸つて、道々にいそしんだ方が仕合せではあらうなア』

最後は述懐らしい言葉でもあつた。儒官といふ幕府お抱への榮官にもかうした心境があるの

かと、六兵衛は今までの野望一つで頑張つてゐた自分の氣持に本當の淋しさと切なさが襲ひかゝつて來たやうにも思つた。

(一一一) 不思議の對面

六兵衛が決心をつけて江戸屋を出るには相當の骨が折れた。こゝまで漕ぎつけた仕事をといつて、善兵衛は御用商人らしい好餌もならべた。

けれども六兵衛には「江戸の窯」に未練がなかつた。榮華と贅澤からはなれた仕事、もつと大衆的な仕事に、やはり臍の緒切つた京都で、年とつた兩親に慰められたり賞められたりしながら精進して見たかつた。限られた仕事に棺を掩うて後の名を求めるよりも、生きてゐる間の潑刺とした脈の打つてゐるやうな仕事が見たくなつた。栗山先生の御時勢の訓話が、それほどひどく頭に響いたのである。

善兵衛が強ひて留めるので、では又やつて参りますと、窯を叩き潰すことだけは止めたが、職人たちは一足先に返してしまつた。氣の早い話である。

要助もこれで一生の願ひ江戸見物は済したのだからと、共に連立つて歸ることにきめた。思

へば不思議な二人の繋がりであつた。

急ぐ旅でもないので、二人は僅かばかりの手荷物を脇かけて、五月、もうソロ／＼汗ばみ出した夏の初め、軽い旅姿で江戸を立つた。

来たときとは逆に見る風景、初めての道のやうな新らしい歡びもある。四月足らずの江戸住居、二人には繰返して樂み合ふ面白さもあつた。京に歸つて、行くところがなければ俺の家へ來い、遊ばしてはおかぬ、身に合ふたやうな仕事はいくらでもあると六兵衛はいつた。

藤澤の葛屋といふ宿で、軽い晩酌をすまして、明日の江の島巡りを女中に聞いてゐるとき要助の身の上に、また不思議な運命がめぐり合はせてきた。

二人はどこまでも京から江戸の道中を無事に連立つては歩けぬ約束におかれてゐたのである。

宿の女中が來ていふには「三日前からお泊りになつてゐるお武家さまが、御老體のお方に、京都六條の治良兵衛さまとは申しませぬか、承つてくれとのこととござります」

要助は目を見はつた。興元寺の寺男に住みこむまでの本名を知つてゐる武家などある筈はなく、いよ／＼胡麻の灰がつきかけたのかとも思つた。人態をよく聞いて見ると、さういふ風に

も思はれない。

『誰か、お連れの方でもありませんかな』

『いゝえお一人きりでござります』

『上りの客人か、それとも下りかな』

『京へお出になつてそのお歸りがけといふことで、足をお痛めになつて、御逗留でござります』

止むを得ぬから會つて見ることにしたが「京のお連れの方があれば丁度幸ひだから自分の方からお伺ひする、お差支はないだらうか」といふことであつた。

六兵衛は「構はない」といつた。

間もなく柳とした羽織袴、女中に案内させて這入つて來たのは三十前後の脊はあまり高くないが、がつしりした肉つきの、柔和な面ざしをした青侍士であつた。

一通りの挨拶を交はした時に、六兵衛は一藝に長するほどの男である、窯の火の色を見ると同じ敏捷さをもつて、その青侍士の聲をしつかり掴んだ。要助の聲と一つの鉦を叩いたやうな同じ響きをもつてゐるのである。眉毛、眼尻、鼻、耳、口元、それもよく見ると要助と瓜二つ

なのだ。

『あなたは、この老人の御子息ではござりませぬか』

六兵衛が意外なこの會見の序幕の柝を入れた。それがキツカケになつて快い幕は開いた。

『ハイ幼名七之助と申しまする不孝者で、あの、矢張り、おやぢさまでござりましたか』
ハラ／＼と青侍士は涙を流した。

要助はその顔と、六兵衛の顔とを忙しく見比べて、大きな掌で膝頭を撫でゝゐたが、とう／＼眼頭をこすり出した。

『お懐しうござります』と青侍士は疊の上に顔を伏せて『この宿にお着の時の姿、廊下を隔てゝのお聲、京のお話、飛び／＼ながら耳に入り、十七年、一度も會はぬ生みの親に、神佛のお引合せでめぐり合ふことができませんでした、このやうな歡びはござりませぬ。お許し下さいませ、不孝者の罪のお詫びに一部始終、物語りがいたしたうございます』

『あゝ、なされ、私に遠慮があるならどいてあげる。要助さん、息子さんに違ひないでござらうがな』

六兵衛は要助にいつた。

『幼名七之助といふからには俵のやうちやが、何うしてお侍士になつたのか、俺にはそれが分らぬが——』

要助は鼻をつまらせてゐた。

(二三) 懺悔と歡び

『懺悔語りと、嗚呼がましい出世物語、どうぞお客さまも、父親さまと一緒に聞き下さいませ』

と七之助は疊に伏せた顔をあげて、

「十三の年隣りの家の店先にあつたお金を盗んで歸つてから正直一途の父親さまが甚い御立腹、大阪の親類へ勘當同様にして預けられ、暫くは店の仕事を手傳ふてもおりましたが、生來の悪性者、遊人と交はるやうになり段々身持を崩し親類にも愛想をつかされ、いよ／＼放逐といふ時に、堺蓮華寺の東雪といふ和尚が江戸への旅、お供をしろといふことでござりました。江戸見物ができるうれしさから、重い荷物も我慢して擔いて参りましたが、途中の宿々で、身の上話をいたしましたところ懇々その不心得をお諭しなされ、和漢いくつもの例を惹いて、親の

恩、主人の恩、それを忘れるやうでは、人間の皮を冠つた畜生、今からでも決して遅いことはない、吃度性根を入れかへて、學問修業をつみ、立派な侍士にでもなつて、父親さんに會ふがよい。俺の觀相では、お前は商賣には向かぬ、氣がたてしい、侍士にならしやれ、吃度出世ができる。俺が江戸へ着いたら好い手葛を探して頼んで進ぜると、それはく親切なお言葉。毎夜同じことを少しも退屈せぬやう、慈悲の言葉で繰返して下さる。おかげで私の盲しんた心の目も開けまして、苦くしみの鞭むちをうけぬためには正しい道を歩まねばならぬと泌々思ひ當り、和尚さまにお願いして、江戸に着くと直さまあるお武家に御奉公いたしました。仲間部屋で皆の衆が品川、深川、吉原と、そんなお話をなさる間も、孝經論語の素讀から、手習、算盤、いろく暇をぬすみ、師匠を求めてやつてをりますと、計らずもそれが主人の目にとまり、中老池田和泉守さまのお邸で十分として御奉公ができるやう、まことに過分なお計らひをして下さいました。ばかりでなく、遂には和泉守さまのお聲がくりでお邸に女中奉公をいたしてをりましたお作と申す女と夫婦のかためをいたすやうになり、丁度八年前一家を構へて、今では二人の子供も設けましてござります。かやうにして安樂に暮しができるやうになりますと、心にかゝるは父親さまと母親おふくろのこと、妻ともく朝夕神佛にお縫り申し、四年前御主人のお供をして京へ上

りました時も、六條の元の住居を色々と尋ねましたけれども、十三年も前のこと、皆目お行方は知れず、残念ながら立歸りましてござります。この正月には京の大火、御無事であれかしとそれのみ一圖に祈つてをりますと、禁裡御普請のことで主人の上京、再びお供を仰せつけられ、今度こそはと心に期して参りましたが、焼野原に板圍ひの假宅ばかり、探し求める方法もなく、主人はそのまま滞在、私は公儀への御用を持ちましての歸り途、足を痛めてこの宿に三日の滞在、それがかうして親子再會の機會を與へていたといふことは、全く主人のおかげ、日頃念する神さま佛さまのおかげでござります。私は夢に夢見る心地がいたしまして、十七年、見ぬ間に太く年取られた父親さまのお顔を、あゝ濟まぬと、いたくしく拜むばかりでござります。過ぎ去りました不孝の罪どうぞお許し下さりませ」と涙を拭ふ。

六兵衛も思はず目を屢叩いた。要助は、長い物語りを黙つて首領きく聞いてゐたが、『よくそれまでになつてくれた。俺はもう何もいふことはない。お前の母親も定めて成佛するであらう。孫ができてゐるといふなら顔が見たい』と六兵衛の方を向いて『柴野先生がいはれた通り又俺は旦那にお分れせねばならぬやうになりました。これも因縁でござりませうな』

と悲しさうな聲を慄はした。

六兵衛も不思議な二人ではあると思つた。けれど火事のやうな不祥で別れるのではなく世にも珍らしい氣持のよい話で別れることなので「目出度いことだ」と元氣づけた。

母親は既にこの世に亡い人と聞いて七之助は落膽した。養はんとすれば親在らず、不孝の後悔は役に立たぬ十七年前、東雪和尚に宿々で聞かせられたことを今更のやうに思ひ出してしみりした。

x

x

x

x

x

x

構想によつてのみ成立つたものでない此物語りは是で終る。六兵衛はそれから一人で京に歸つて、望み通り大衆のための六兵衛焼を完成した。要助は七之助に伴はれて江戸に引返した。和泉守は七之助の話聞いて深く感動し、要助をも共に抱へて料理番を仰せけつるといふことであつたが、それでは冥加に餘るとて固く辭し、七之助の許もとにあつて、優しい嫁と二人の孫を相手に楽しい老後を送つてゐたが「正直要助」の名が段々公儀にも聞えて、京の火事の時萬里小路卿の預つた箱の話を、あちこちのお邸に呼ばれてせねばならぬことが多かつた。

栗山先生の許へも折々は尋ねて行つた。

紅緒の箱が因縁になつて息子に逢へた奇談は、いろ／＼の意味で當時人心の緊張に苦心してゐた幕府の當路に『好い手本、正直の徳』として喜ばれた。

その後幾月かして興元寺の禪惠和尚から「逢ひたい」といふ頼りが來た。要助の奇遇の話が京にまで届いたのである。律義な要助は「和尚さまは無事だつた、逢ひたいとは何といふありかたのお言葉であらう、俺も逢ひたい」と無理をしても京へ上ることに決め、ぼつ／＼支度をしてゐたが、氣の弛みからか疝が出て枕頭を離れぬ俸と嫁の手厚い介抱をうけ、無心の孫たちにまつはられながら、その年の冬、京より遠い黄泉あのよへの旅に上つた。(おはり)

(参考書目) 續近世時人傳、燒野の日記、甲子夜話、池魚錄、續徳川實記、事實文編、昌平志、武功年表、陶工傳誌

二三、人生三世紀相

|| 感激から分別へ、そして悔悟と諦めへ ||

一、酔 楊 妃

|| 青年時代 ||

垣一重隣りに住んでゐた、頬の赤い脊の高い女教師に「お植ゑなさいよ」と押しつけられたコスモスの幾株かを、廣い庭園の片隅に植ゑこんで土をかぶせておいた。それが不思議と、馬糞のかけも與へてやらないのに美しい花が綻びかけた。見せて自慢をしやうかと思つた時には、もうその女教師はどこかに引越してゐなかつた。

夕間暮れ、庭下駄をつゝかけて、撈りとつた一枝を、机の水入に挿して見たが、急に淋しい感じがして、じつとしてゐても詰らない氣がする。

カウリと妙に腸にしみるやうな啼聲を立て、鴉が頭の上を飛んだ。飛んだ先に馬場がある。

馬場の松の並木の下を歩いて、梢に浮ぶ日暮山ひぐらしやまの黒い姿を見てゐると、屹度いつも後ろの方を、樋の堰へ下りて行く娘があつた。この一月ばかり、何うしたのかソレが見えない。

水入に挿したコスモスの一輪を襟にはさんで明笛を手にふらりと出た。

馬場の松は、遠く稻子村の果まで續いて、落松葉がまづかに道を埋めてゐる。

大きな鑽石の上に腰を下して、明笛を吹く。いゝ氣持の音が、梢を互る風に乗つて、大空に消えて行つた。

あの娘は何うしたらう？。夢に見たりするほどの大事でもないが、思ひ出した刹那に、妙な胸慄ひが起きて、心臓がキリ／＼刺れて、急に腸はらわたの力がなくなる。

袂をのぞいた緋縮緬の褌絆、大きな蝶のリボンが躍つてゐて、大地を撫でるゴム草履の音がとても柔かだつた。

ふり向かれたことは一度もなかつたが、我から道に向ふにとつて、行き違つて見たことがある。娘はたしかに、笑つてゐた――。

娘時代の命は短かい。蝶のリボンが紅い手がらに變つた時に微笑む、それが若い命に最後の手向だ。も一度笑つて見よといつても、重い。

何うしたらう？。重い微笑みに、愛をつないで、強ひて形づくる楽しみの中に輝く光は、人の世の終末の賢こかれよ清れかよとのみ。

まさか——それにしてもまだ早からう。袂を覗いた緋縮緬の色に若い命は漲つてゐた。梢を落ちた餘り風に、襟にさしたコスモスを吹き散らされて、あなやとばかり、鎧石を離れる。暮色蒼然として、日暮山の尖つた頂が次第に松の梢に迫る。

切めてもの道を、樋の堰に取つて、未練な足取りである。

ゆくりなくも振向いた、その後ろに、暮の色にも浮いて別れた酔楊妃の一束を頬にもたせて、袖口を小さい胸にかき合はした娘！

明笛を電のやうに手から手に持ちかへて、道に添ふた小溝の縁の丸太杭を小楯に、何の小娘通れぬことも、やり過すこともあるまいに、ツイうっかり佇んでしまった。

軽く腰を落して、躊躇ひ氣味に、酔楊妃が恥しさうな頬を撫でゝゐる。名も知らぬふつくりした薫りが、鼻をかすめて、ゴム草履が荒く鳴つた時、佇んだ隆とした青年の、何といふ腐甲斐ないことだ——。追ひすがつてと、うつゝに走り出した横手の黑板塀の中から戸が開いた。萬事休す。

その夜机に、ランプの火を細目にして、縷々數千言、書いては消し、消してはもみつぶした反古が、物情騒然として、瘦せ細つた若者の膝を埋めた。

明日が旗日、赤飯でもこしらへてナと、母が神棚に燈明をさゝげながら、のんびりした聲で、柏手二つ三つ「又御勉強かな」とは罪もない。

人静まつて肩を叩くものがある。怖れを帯びた發作的な歡びにふら／＼と立ち上り、足爪立て、小縁の雨戸を繰つた。

夜は暗なり、白い手に縋らずやと、滑らかな玉に頬摺りをした時の氣持だ。人がゐなければ聲をと思ふまで、男らしくもない、卑怯なことだ。

靴脱石に、突かけ下駄、庭の小芝の露をふんで、咲き亂れたコスモスの中を、惜し氣もなく踏み分け、搔き分け、竹の門を外に出たのが町の方に行く一筋の往還。

さて、見れど、猫一疋の影もない。確かに肩は叩かれた。遽かに恥かしくなつて遁げたのか？。

北斗燦として、夜氣迫る。追はゞ樋の堰、馬場の鎧石、母の夢見の心許なや。

道芝の露を蹴つて、急いだ馬場の樋の堰にさら／＼と水の叫びが聞える。並木の松の梢に風眠つて、寂たり。娘はゐない。

あまりに急いで、竹垣の外に取残しておいたのか、この暗の夜に――。

撫然として腕を拱く。水の叫きがハタと止つてツイ目の前に眞白な火の玉。何の奇瑞かと唖を張つた時、火の玉は二つに破れて、中から大きな醉楊妃に乗つた娘が、朦朧たらず――オ、醉楊妃。

……摺りよらうとした刹那に、その醉楊妃の花びらの一つを撈つて、厚かましい男の顔にバラリと投げた。

バラリと投げる、バラリと投げる、投げて投げつくして、憐れみを微塵持たぬ微笑み、残つた薬に抱きついて、火の玉と一緒に大地の中へスーと消へた。

咽喉一ばいに、氣ちがひのやうな叫び聲をあげた時「赤飯ができましたぞ、旗日じや、早くお手水をお遣ひなさい」と枕もとに母の聲。

濡れ縁に立つて、コスモスの花を力なく白眼む。

向ふの家に、旗が朝風をうけて、快く翻つてゐる。

「醉楊妃も紅かつた」――。夢はいつまで経つても消えないのだ。

(明治四十一年十月)

二、嵐の渦

|| 中年時代 ||

「少し揉んであげる、こゝへ頭をお乗せ」

と母の寛子は太い膝頭を出した。キリ／＼痛む後頭部に、柔かい、温かな感觸。四十五の大男を捉えて、腹を痛めた親身の母にしては、まだ赤ん坊の氣持なのだつた。

硬ばつた指がこめかみのあたりに觸る。根が百姓育ち、土に鍛はれて、その一指にも無限の力があるかのやうに、實はつよすぎて皮膚が剥け切れさうなのだが、圭一は黙つて目を潰つてゐた。

「毎夜々々、夜勤のおつとめだから、それで痛むのだ。あんたは小さい時からこれが持病だつた」

後頭部から額にかけて、鷲づかみにするほど母の手は大きい。

「アスピリンでも差上げませうか」

と寢巻姿のまゝ妻の温子は覗く。

「もう三時でせう、今夜はともお歸りにならないだらうといつて、寢んでみましたの」

「御苦勞なことだ」

ふと細目に見ると、母の寛子は目をつぶつてゐる。それで仁王のやうな手は、力一ぱい動いてゐるのだ。

「眠くはないですか」

と圭一は言つた。

「眠いどころか、あんたのことを思へば。もうグツスリ一寢入りしたのだから」と、一段また揉む力が増して來た。

「お母さん、少し私が代りませう」

「いゝや、何ともない——」

「お前の手ではダメだよ、小さくて」

と圭一は顔のそばへ持つて來た温子の手を拂ひのけた。

「まだ色々、世間の騒ぎは、治まらんのかな」

「まだ続きます」

「お向ひの職工さんも、西隣りの親方も、三日とか四日とか、歸つて來られんさうだよ」

植民地のやうに、新らしい家が建つて行くこの築港の埋立地には、いろ／＼な仕事を持つた、いろ／＼の階級の間人が、雜然と入り交つて住んでゐる。戦争景氣で、恐ろしく威勢のいゝことをいつてゐた西隣りの親方は、二三年前まで二町ばかり横手の狭い路次にゐて、毎朝アルミの辨當箱をさげた自由労働者の沖仲仕を七八人も集め、大きな聲で行き場所の籤を渡したりしてゐたが、いつの間に儲けたのか、仲仕賃が一圓四五十錢から一ぺんに五圓になつた、七圓になつたと、喧ましい評判が立つてゐるうちに、西隣りの新らしい借家に移つて來て、自動車を買つたといふやうな話を、おかみさんが吹聴してゐたし、議員の候補に立つといふやうな噂も立つた。

「人といふものは侮れんぞな」とは、いつも聲を低くしての寛子の述懐であつた。

「でも仕方のないものだ、おかみさんもあの通りだし、第一息子が不良になつて悪所通ひに金を遣うて中學もやめさせられて——人は氏より育ちといふが、よくいふたものだ」

と、これも壁一重で、絶えず耳に入る怒聲、罵聲、酒の上での管、短刀が何本も床の間に置いてあるといふ恐ろしさと煩さゝから、日に一二度は屹度聞く母の寛子の述懐であつた。

空氣が、海に近くてよい、道路も町中とは廣い、子供を遊ばしておいて心配のない遊園地も

あるし、家並も疎らだから、面倒な隣りづきあいもなくよい。淋しい位のこととは、いつて、この埋立地の草分時代に、頻りに不便ばかりをいふ妻の温子を説いて、住み移つたのであつたが、歐洲大戦が始まつて二三年もすると、天地が一變して、鐵材の暴騰から角柱を組み合わせはたやうな木造船の大きなのが、あちらこちらにできかける、埠頭には毎朝沖仲仕が蝗の群れのやうに集まつて来て、喚き立てる。人の話は黄金の津波が押し寄せて来てゐるやうなことばかりで、大がいの者が有頂天だつた。

その有頂天の、成功者のモデルのやうに近所の人に羨まれもしてゐた親方が、急に襲ふて来た嵐の渦に巻きこまれて、宅へも歸つて來られぬほど痛い目に合つてゐるやうなのである。

「一升の枀には一升、五合の枀には五合、餘計に盛ると皆なこぼれる——」

寛子は目をつぶつたまゝ、圭一の額を揉む指の力は強くなつたり弱くなつたり、緩急自在な運動は、随分と長くかける苦勞である。

「いゝあとは悪いともいふし」

といふ母の溜息におつかふせて、

「平凡がいゝんですよ」と圭一はいつた。刺すやうな後頭部の痛みがゆるんで來た。

「少しホットでも召しあがりますか」

酒を嗜まぬ圭一であつたが、時々ホット、ウキスキーだけは舐めた。

「さうだね、しておあげ」

と寛子の返事の方が早かつた。

息づく隙もない。吹雪のやうに編輯の机の上へ寄せまくる原稿の處理、けたゝましい電話の應答、腕まくりする訪問客、人事の移動、そんな話を断片的にする圭一に、母親は滿幅の信頼と同情を寄せてゐるのだ。

年を積んでも純情を失はぬ妻の温子もさうなのだ。まだ世智に揉まれておらず、遊園地に砂をなぶつて遊んでゐる來年中學の子供の延雄もさうなのだ。朝起れば父は寝ついたところであり、父が起れば子は學校に行つてゐて、ことよれば月に一二度しか言葉を交さぬ父と子だが、子はそれでも祖母に聞き、母に聞いて、父の勤めの、決して世間一般の會社勤めのやうな呑氣でないことを知つてをり、大臣に會つたり、從軍したり、書いた小説が劇になつたり、だから「えらいんだ」と思つてゐるのである。

この世に——人間の生活に、裏面史といふものがなかつたら、いかに朗かだらうと、圭一は

よく思つた。

一流の料亭の珍味を誇る料理も、度重ると、珍味ではなかつた。化粧の者の眉も、襟首もみつめてをれば、眉墨の跡がクツキリ分り、濃い白粉の線が曖昧な國境線よりもぎこちなかつた。

それでもツイ時間が経つと、歸れば母も、妻も語らぬ先から苦しい夜の筆の勤めにしてしまふのである。

圭一は、初めはそれが辛かつたが、いつか却つてよいことにするまで、習慣づけられるほどさういふ機会が、次から次へと湧いて來た。

しまひには情味をつけ加へたやうな冗談も言へるやうになつたし、盃も二杯、三杯までは何うにか片づけられるやうになつた。

今夜の頭痛も、全く杯のためだつた。

圭一は母や妻ばかりでない、自分を欺いてゐる——この頭痛が——と、克明に揉んでくれる母の寛子の指が、神の鞭でもあるかのやうに感じられて、痛みが薄らいでくると、ジリ／＼と、の尻に涙が滲み出して來るのである。

「けふの夕方、是非お目にかゝりたいと、棚木さんといふ若いお方がお見えになりましたが」と妻の温子はコップにウキスキーを注意してつきこみながら言つた。

「棚木が來たか。さうだ約束をしておいて、忘れてゐた」

「忙しいんだからね」

と母親は、何であらうと圭一へは百萬の味方である。

「別に、何も言はなかつた？」

「承つておきませうかと申しましたけれど、社へ伺つても何うかと思ひましてと、それだけお仰やいまして——」

「猛烈に入社の運動をしてゐるんだ、いゝ青年だが、少しやり過ぎるね。來年、延雄をあの中學に入れるとなると、棚木は先輩だから、骨を折つて貰ひたいし」

「まア、さういふ關係なんですか。では是非、社の方へもねへ」

「さうはならんよ、勝手に」

圭一は母の膝からはなれて、いゝ香ひを立てゝゐるホットのコップを、寢腹這つたまゝ掴んだ。

「熱いんですよ」

「熱い！」

「まあ、水でも少しさせばよいのに」

x

x

x

x

x

x

十割の配當、二十割の賞與と、潮に乗つたあらゆる會社の、空中樓閣でないらしいのが、圭一には何うしても呑みこめなかつた。

羨望が全く起らぬほど超人的ではなかつたが、圭一は依然として指をきたなく染める朱筆執るのに忙しければ忙しいほど、満足と光榮を感じてゐた。

物慾がうたがたの夢と消え去る日の間近なことを想像して、圭一はそれを構想の基調に、本務の間隙を縫うて書き續けてゐた小説「黄金の津波」を百回で結んで、これが豫言としての中するか、しないか、職として鋭敏に動いてゐる第六感の價値を自ら問うのでもあり、財界への警鐘でもある。書きたい病のなす業と、何がため逡巡したりすることがあるかと、勇敢に紙面を要求したのが三月あまり前のことだ。

その大團圓の日が明日なのだ。

圭一は、憂世の氣慨で一ばいだつたが、豫言の的中を前夜に知つて、第六感の存在をまさしくと知り微笑したのも同時であつた。

圭一は自分の仕事の神聖を、斷じて冒されてはならぬと思つた。

いつまでも頭痛持で、母親の手を煩はすやうな弱いことでは、何うなるか、とも思つた。ホット・ウキスキーが呑み加減にさめて來た。

夜が白々と明けて、窓にさすプラタナスの上に、雀が快く囀り出した。

母は圭一の腰のあたりを揉みくく舟を漕いでゐる。妻の温子はもう流しもとで、女中も起さず、米をといでゐる。

朝刊が投げこまれた。摩擦電氣が紙の間にまだ蓄電されてゐて、頁をまくらうとしても引ついてはなれない。

圭一は新しいインキの香をかいで、一互り、さつと標題に目を通した。

(大正九年十一月)

三、拔萃帖と箕蟲

|| 老境時代 ||

嵩にかゝつて掻き集めた和洋の古書で、書庫も書齋も、應接も、玄關も、客間も、寢室も、女中部屋も、寸隙ないほどの障壁をつくりあげて見ると、僅か八年前に建てた家も、あちらこちらが不規則に歪み出すほどの重量になつてゐた。

「でもお父さんは、何所に何があるか覚えてらつしやるのよ」と媳の郁子には不思議でおかしいらしい。

「掃除が出来やしませんよ」と孫の外に興味のない老妻は、毎朝のやうにぶつ／＼いつて、和本の間をハタいてゐる。

電話が來たと思ふと「行つてもよいか」といふ碁敵の常念寺の和尚であり、三股神社の祠官であり、全科の藪野笥菴であり、蛙飛びこむ字餘菴の宗匠である。

女中と郁子が片身代りに碁盤の間に持出す紅茶、珈琲を、完全に呑み終つた本因坊はひとりもなく、碁器と間違へて石をつまむ指をつゝこんだり、疊の上に供養をして「ア、すまん、ねへさんちよつと雑巾だ」と喚く。

一局十五分、百目位のとりやりをしなければ碁に勝つた氣のしない連中だから、二三面も列ぶと機關銃が戦線に鳴つてゐるやうに喧ましい。

「三國同盟はいゝですな」

こんな話をやり出したのは黒星ばかりを稼いだ敗け頭だ。

「いゝとも、ね、同盟は——これを斯う食はれると——」
相槌は横の方を叩いてゐる。

「あゝいかん、却か、箆め手だ、卑怯だぞ」

怒號だが、怒氣はない。

かういふ時の訪問客は、同じことを三四度も繰返して、やつと耳に入れて貰へるから災難だ。

ふと、思ひ出して、笥菴は龜山のゝ兵衛のやうに立上つた。

「遅れた／＼、えらいことだ、失敬する。隣保會の相談があつたのだ」

「あんたも世話係か」

と宗匠が入齒をゆさぶりながら聞いた。

「家持で古いといふところからやつてゐるが、晝間は隣保が勤め人ばかりで、女の人しかゐないものだから、相談は何うしても夜になる。今日は町内會から呼ばれて、配給の相談だ」

「それは御苦勞——」

「中々この隣保といふのも、自覺が足らるので骨が折れる。大分土臺は固まつて來たが」

「あんたが頑張つたら、固まる。矢張り多少は強力統制で行かぬと、自由に馴れて來てゐたのだから」

「ではまた——」

筍菴が歸つたところへ、遠縁に當る關係から仲人に立つてやつた若山俊雄と妻の鯨子が珍らしく、この宵の口に來たのである。中盤まで有利に進んだ局面で、惜しくてたまらないが、新夫婦をほつておく譯にも行かなかつた。

「では、俺らも失敬しやうか」

と諦めるキツカケができて、皆どや／＼と立つてしまつた。丸で洪水の跡だ。

「何うだ、元氣かね。新生活は面白いかね」

と「老書生」を話の間に幾度も繰返す古川銀平はマンテルピースの前のソファに腰を下し

た。

「小父さんは七十を越してゐるとは何うしても見えない、白髪はあり、齒は擬物のやうだが、相變らず元氣ですな」と若山はいつた。

銀平は黄色く染つた二本の指の間に曉をはさんでゐた。

「元氣だ、入齒なぞ一本もないぞ、これで毎朝冷水三斗を浴びてをる、ラヂオ體操も缺かしたことがないからね」

「酒はだめでしたね」

「呑まんよ、ア、いふ不都合な亡國の水は」

「そんなにいけないですか」

「いかん。狂ひ水ともいつてね。酒を呑んだものに長生きをした試しがない」

「何か特に嗜好物ツて、あるんですか」

「三度の食事だ」

さういはれるだらうと俊雄は思つてゐた。

「時局は、何うなるんです」

「若い者は、直にさういふことを聞く。忍苦をすれば、光明がある。今が忍苦時代だ」

「日清、日露戦争時代は、何うだつたんです」

「國運が隆々と伸びて行く」大きく胸を張つて「愉快だつたよ。俺たち老書生は生甲斐のある時に生を享けたものだ。天の恩、君の恩。胸中にはいつも感謝で一ばいだね。俺の父親などは封建時代で、大名に苛められて、糠のやうなものばかり食つて漸く露命を繋いでゐたのだ。それに俺たちの時代になつてから、さまざまのものを食ふ、呑む。罰が當るね」

「百姓をやつたことがあるんですか」

「あるとも、小學校から歸ると、まだ十一の時分から、山へ行つて薪をこしらへて、それを牛の脊に乗せて町へ賣りに行つたものだ。二十貫持つて行つて十二三錢にもなつたかね。麥飯を柳行李に詰めて貰つて、菜は鯖と焼豆腐の炊き合せ、一人前が七厘、牛の靴をはかせやうとすると、蹴る、冬の日には赤切から血が出る。随分辛いものだつたよ」

「實際、そんなことを、やつたんですか」

「やらなければ、村の人に怠惰者だといつて排斥される。村の習慣、掟といふやうなものが今のやうにルーズでない、儼とした不文律があつて、よく守つたものだ」

「さういふ時代と、今かうして、文化住宅に、書物に埋もれてゐると、どちらがいゝです？」

「どちらもいゝ。衣食足つて禮節を知るで、我々凡人は衣、食、住、どれにも勝手な憧れを持つ。ズツと大きくなつてからだが、成功談を實業雜誌で金科玉條のやうにして讀んで、色々の夢を見たものだ」

「僕たちは何を夢見ていゝんでせう」

「夢を見る必要はない。努力だ、忍耐だ。最大の努力を拂つて、最少限度の生活をする、この覺悟が必要だ、君たちは日本の物質黄金時代に大きくなつたんだから、本當の苦勞を知らぬが、平凡な眞理、因果律、自然の法則といふものを知らねばならん」

「何ういふことです」

「寒い冬の次には暖かな春が来る。夏の青葉は秋になつて落ちる、じゃないか。これだ。人間の一生には必ず起伏がある。だが百のものは百だ。若い間に遊んでおけば、年を取つてから苦しむ。神さまは公平だよ。若い内に苦しんでおけば、年を取つてから、餘生をしみじく楽しむことができる」

「ぢや小父さんは餘生を楽しんでゐるんですね。子供の時に牛を追ふて苦しまれたからそこへお茶が出た。」

「コーヒはないぞ、茶も番茶だ。飯にはさ湯にきめてをる」

「えらいですね」

「贅澤は悪習慣の外何ものでもない、ガソリンがなくなれば、君たちだつて歩くぢやないか」

「ハイキングで鍛へてをりますから」

「俺らのハイキングは大峰参拜、高野詣で。歩いたものだ。一足の草鞋が何日はけるかと、そんな自慢をしあつたものだが、一日に十里歩行いて一週間履いた男がある、薄い紙のやうになるまで、上手に履いたね」

「宿はどういふ風でした？」

「俺の八つの年に、京へ行つて、三條小橋で、一宿四錢だつた。御馳走が出たよ。奈良の三輪で二錢五厘で泊つたことがある。茶代といつたら文久錢一枚にきまつてゐた」

「乗物は」

「最上が俵、二人乗で、一里が二錢、歸り俵だと一錢でも乗せたね」

「嘘のやうですね」

「夏帽子が何うしてもほしくてね、夏中野山のやまへ行つて、草を刈つて、父からその駄賃に十三錢を貰ひ、槍であんだ今のカン／＼帽のやうなものを買ったことがある」

「汽車にはいつ頃乗りました？」

「京都から大阪まで、九つの年だつたかな、板敷のコンパト。目が舞つてヘドを吐いたことを覚えてをる。大阪へ用があつた譯じやない。何所でも降してもらへると思つて乗つたんだが、とう／＼大阪まで行つてしまつた。叱られてね驛長に、向町と山崎の間で降りるつもりだつたんだが――。笑つちやいけない、急行ができたのは日露戦争からズツと後のことだからね。面白い話がある。俺が子供の時分は、まだ舊幕時代の氣持がぬけきらないで、親父はしば／＼庄屋だの殿さまだの家老などいつて、倉の中の南蠻渡りの鐵砲はみつかるとお取上げになるから、長持の底へ隠しておけとか、槍は殿さまの御紋がついてゐるから、何うとかいつた。村の戸長が、藩の家中から来てゐたが、月給が六圓、高い／＼とコボしてゐたよ」

「お小父さんの初任給は？」

「一圓二十錢、一月にだよ」

「一日に四錢ですか」

「さうだ、ソレで米一升になるんだから、結構なんだ。たまく／＼縣の役人が洋服でやつてくるとエライ人だと思つたね」

「進歩したものですね」

「進歩か、まアさうだらうね。しかし、精神は君たちよりも、確かりしてゐた。村に若中といふものがあつてね、今の青年團だ、これも不文律で、嚴重な秩序と制裁があつた。戀愛にもチヤンと統制があつたからね」

「戀愛の統制、面白いですな」

「村の娘が他の村の若者と戀愛をしてはならん。まアさういふ風だ。若中は祭事を主裁したから、殆ど神聖視されてゐた。それで規律を紊すやうなことは斷じてなかつた。規律を紊れば忽ち八分にされて交際を斷れる。我儘な自由がない。それでよかつたと思ふ」

「新聞は讀みましたか」

「家計にそんな餘裕がない、村役場に一枚取つてゐた、ソレを廻し讀みにするんだ。ニュースは人の耳から口へ傳はつた。磐梯山の破裂、三尾の地震、悉く耳から耳へだ。それでもソ

なに遅くはなかつた。百圓も借金すると、一生かゝつても返せなかつた時代だからね。酒一升が十二三錢だつたが、それも買へないで手造りの濁酒だ。味噌も醤油も無論手製だ。だから母などはあらゆるものゝ醸造法、製造法を知つてゐた譯だ。今思ふと面白いね、丸い脚付の鏡の前で眉を剃る、鐵漿かみをつける。頭髮はサツコとかいつて、眞四角な嵩の高いものだ。白粉なんか嫁入の時につけたきりだ。だからいつも素肌の女が見られた譯だ、美人なら本當の美人だ。化粧はやむないからね、頬に日の丸を書いたりして……」

「アレはアメリカ映畫の感化ですよ」

「映畫といふやつが、碌でもない悪風を齎らした。俺は絶対に映畫は見ない」

「嘘でせう」

「見ないよ、見ても見ないよ、老書生に必要なはない」

「何ういふのです」

「心で見ない。君たちのやうに嬉しがつては見ない。悲憤慷慨をしながら見る——」

「面白い辯解ですな。でも面白いでせう」

「戦線にある將士の活躍狀況を知るとか——ソレは必要だ。ニュース以外は一切やめたがい

「んぢやないか」

「民衆の娯樂として、格恰ですよ」

「娯樂を要求するのが抑々いかん。人生は勞苦が娯樂だ。ナチスもさういつてるぢやないか」

「何うですか」

「勞働が通貨の基本、經濟資源といふぢやないか」

「さうもいひますけれども、金かねを持たざる國の變態的法則だともいつてゐますね」

「さうかね、俺らの青年時代は穴あき錢で事が足りた。通貨などいふものは人間生活に、大した意義はないね」

「勞働力が大切だといふんですか」

「さうだ、生産だ、生産をするものは紙幣ぢやない、資源と勞力だ」

「ナチスの通りいひますね」

「そして勞力だ、經驗だ、熟練だ。終生一つ事に携はつてゐるものは、何をしてゐるものでも尊い。今の一部の青年のやうに、いゝ口を探してうろくしてゐては、一生人間にならな

い、國家にも役立たなう」

「生活が、さういふ風に壓迫するんですよ」

「第一、生活といふものを間違つて考へてゐる。生活はダンスをすることでも、音樂を聞くことでもコーヒを呑むことでも、カフェに潜行することでもない」

「潜行？」

「潜行だ。それだけまだ、良心が保たれてゐるんだがね。悪いところだ、當然行くべきところでないといふことは、流石にチャンと分つてゐるんだ」

「お小父さんも、若い頃は矢張り青樓ちやうで遊んだりしたでせう。明治維新の際の志士だつて、皆情話を持つてゐるでせう」

「だが、ソレだけ働いてをる。國家に働かないで、情話ばかりつくつてゐるんぢやない」

「何うも、小父さんのお話を聞いてゐると完膚なきまで、叱られ倒してゐるやうだ」

「さう思ふか。事實と信念をいつゐるだけなんだがな。それでも叱られてゐるやうに感じるだけ、君はまだ純眞で高潔なんぢやないか。反感を持つやうになつたら、全く仕様がないう」

「ありがたう」

「鯨子さんはどんなことをしてゐるかね」

「この間の防空訓練には、夜中二度も起きて、モンペをはいて、出かけましたワ」

「さうか、それはよかつた。けふもそのモンペを着て来ればよかつた、もう長い袖は立ち截ることだ、頭髮も——さうだ、まアそれなら宜い。しかしまだ少しばかりウエーヴが残つてゐるね」

「さうか知ら？」

と鯨子は頭に白い手をやつた。

「徳川時代に奢侈の禁令が出て、矢張一番女の頭髮のことが先だつたね、丈長の制限、元結から鬢の出し方、とても喧ましいもんだつた、殊に天明期のが厳しい。町藝者で伊豆の大島、八丈島に流されたものが大分ある。男も帯刀から印籠、煙草入れ、皆制限された。外國の餘り物を買つてからだを飾り立てゝゐても仕方がないじやないか。ダイヤモンドでも自動車でも、ガソリンでも、フィルムでも皆餘りものなんだ。寫眞機でも、ミシンでも、みなさうだ。この前の大戦に折角六七十億の外貨をとつておいて、二三年の間に、餘り物でドシ／＼拂つてしまつた。物を節する、大切にするといいふことを知らないほど世にも恐ろしい馬鹿なことではない」

「また老書生先生のお説教ですか」

とソコへ老妻の稻子が、白髮染で漆のやうに黒くした綺麗な頭を撫でながら、菓子盆を片手に持つて出て来た。

「もうしつかりお説教をうけてをります」

と若山は椅子から立つて禮をした。鯨子も丁寧に頭をさげた。

「老書生先生は毎日碁と古本の首ツ引でね、お掃除も何もできないのよ」

「随分お集めになりましたね」

と若山は改めて壁面を見廻した。

「ナアにいくらかもありやせん、悪書ばかりだ。けれど悪書も、愛書家に乗てられてゐると思ふと可愛想になつて、ツイ買つて見る氣になるんだ。第一老書生の浪人には値が張らんでよ、十圓札一枚持つて出ると二十冊位は持つて歸るからね」

「随分高くなつたでせう」

「高くなつた。ロンドンから持つて歸つたものなんか、輸入ができないから先づ何倍といふ値だね、爲替の関係もあるし、ロンドンが爆撃でやられてゐるから近い將來に書物が這入つて

来る見込はなし」

「開放なすつたら何うです。私設図書館として」

「それもいゝが、大體歴史物ばかりだから青年達には興味があるまい。それにこの老妻がとても賛成してくれんよ」

「おばさん、賛成なさるでせう」

「何を？」

「こゝを図書館に開放なさるんですよ」

「御免よ、そんなこと」

「あれだらう。家庭の統制も、節約も、先づ臺所が基礎になつてくれなければ仕方がない、一汁一菜にしろといつても、この年になつて食うものも食はず死んでは詰らないじや、徹底しない。客があつても茶だけでおけといふが、ソレ、そこへ菓子を持つて出てをる——」

「まア——ねへ若山さん」

と稻子は目をむいた。

「理屈がさうなんだ、俺が基友達に馳走をするのは別だがね、はゝゝ」

「勝手なものでせう。あれだから臺所が根元とは限りませんワね」

「物價は、統制になつても、いろ／＼な關係で高くなり易い。だが、家庭では收支のバランスが取れるやうに、しつかりやつて行かねばならん、それが主婦の責任だ。鯨子さんの責任も軽くはないぞ。公設へは毎日行つてゐるかね、御用聞きなど入れて澄してゐてはいかんぞ」

「はい、行つてをります」

鯨子は顔を眞赤にした。

「形式的なことに拘はつて外出ばかりしてゐてはダメだ。第一、家を守ることを忘れないやうに、しつかり習慣づけるんだね。洗濯も裁縫も皆人手に渡すんじや、不經濟だ。うちの婆さんなんか、壁をぬる、竈を築く、何でもやる」

「本當ですか」

「本當だとも。俺らが結婚した時は貧乏でね。夜なべに二人ランプの薄暗い火のそばで賃仕事の野紙を刷つたり、足袋を縫つたり、呉服物を包む文庫紙を磨いたり、萬能技師のやうなものだつたね」

「小母さんたちは、どんなものを着てゐました。金糸銀糸なんかかつたでせう」

「精々久留米の紺紺さ。でも若い女房が紺紺の單衣を着て、赤い褌がけで働く、粹なものだつたよ」

「寫真でも残つてゐませんか」

「その當時は硝子寫しで、村から村へ年に一度か二度、屋臺を擔いで寫真屋が寫しに來た。その時を外したら、寫真を寫すといふやうな機會は絶対にない。時々アノ時に寫しておいたらなアといふんだけれども、高くてね、寫さなかつたよ、桐箱入の手札で一枚が五十錢もしたからね」

「それで高いんですか」

「とても高いんだ。十四五の時分白金巾の兵子帯一本が欲しくて堪らないんだけども二十錢もするといつて、母が容易に買つてくれなかつた。田舎では米を賣るか、薪を賣るか、今のやうに養蠶も發達してゐないし、全く金を儲ける方法がなかつた。地租と、村の戸數割、今日からいへば鼻糞ほどの税金だが、それを納めるに父親はとても苦勞したものだ。何でも或年税金のため一山丸裸にしたことを覚えてゐる。だから生活も質素なもので、麥七分米三分の飯に鹽漬の菜葉、米の飯を食うのは正月とお盆と秋祭だけだ、肴魚なんか、時たま乾物位はあつた

が、年柄年中精進料理と思つてをれば間違ひない。砂糖といへば無論黒砂糖ばかりだし、それも煮物に入れたりなんかしない、手の平にのせてもらつて子供が舐める位のものだ。配給制度になつて愚圖々々いつてる人があるが、怪しからんと思ふね。だから、かういふ風に育つて來たのが第二の素質になつてゐると見えて、病氣をしたりすると、粗食にする、さうすると直に治る。つまり贅澤は命を縮めてゐるね、これも自然の法則だ。長生きがしたければ粗食と少食に限る」

「じゃ節米も健康と一致する譯ですか」

「子供の時から贅澤に育つた君たちには何うか知らんが、俺や婆さんには節米と健康が一致する、一致してゐるからこんなに元氣なんだ、若い者には不平らしいがね」

「冷房、暖房などもいけないといふ話があります」

「夏は暑い冬は寒いのが當然だ。それにさからつたやうな設備は人間を弱くするばかりだ。戦線に冷房があるか、暖房があるか。俺らの小學校時代には小さな爐が校舎の眞中に一つあつて放校時間に、代り合つて手をあぶる以外、何もなかつた。だから子供でも皆あかぎれを切らしてゐた。辨當の飯が凍つてゐて、いつも氷といつしよにガリ／＼食つた。茶だけは茶番が配

つてくれたがね」

「娯楽といふやうなものは、何もなかつたんですか」

「秋に来る大神樂、村芝居、盆踊り、正月のカルタ遊び、淨瑠璃の稽古、將棋、夜話し、集錢出し——これは一寸分るまいが、米や芋を持寄つて五目飯をつくつて食ひ合ふ、まアソレ位のものだつたが、とても楽しかつた。早魃の時に雨が降ると雨喜びといつて村中が一日休んだ」

「煙草は？」

「手造りだ、手刻みにして鉈豆でスバ／＼やる。それも廿歳はたちにならねば呑まん。考へて見れば單調な生活だが、それで不自由も不平もなかつた。知らなければ習慣もつかない、それが日清、日露と戦争のある度に、色々のものが輸入されるやうになつて、飛躍的に贅澤になつてしまつた。だが本當の贅澤になつたのは世界大戦からだ。惠まれた文化生活——結局は國力と國民の健康を消耗したゞけのことだ。しつかりやつてくれ」

「ありがたう」

x

x

それから一週間の後若山は、新婦の鯨子を連れて滿洲へ旅立つた。

東邊道から「無事ついた」といふ簡単な葉書をよこした日に、銀平は初めて夫婦が滿洲へ行つたことを知つたのである。

その葉書を見ると、銀平は書庫に這入つて山とある新聞記事のスクラップ、ブックを出した。その中は彼が四十年苦闘の記録で一ばいだつた。

ばら／＼とまくつて、飛び／＼に見てチラ／＼目に映る一項目が、凡て彼の深い感慨であつた。

青春の血が燃えさかつてゐた時代からの産物——といふよりも、眞鍮な魂の結晶といつた方が本當だ。どの片々たる一項目も、眼光が紙背に透れば社會相の縮圖であり、生きたこの世の歴史である。不用意に人を憂ひさせたかも知れない、人を傷けたかも知れない。巧みに糊塗されてゐた家庭に荒波を立たせたこともあるだらうし、顯官が忽ち地に亘つて奈落に陥ち、榮華の富商が丸裸になつて路頭に迷つたこともあるだらう。それがその者の罪か、自然の因果律の法則に支配されたのか、筆の力か、筆の禍ひか、俺の知つたことか。

「俺は忠實に天職を守つたのみだ」と古川は呟いたが、スクラップが腫の底に電のやうにう

つると、堪らなく憂鬱になる。

悪にも悪の理があつたらう。彼等は生活と虚榮を何うすることもできなかつたのだ。しかし社会はそんなものを許してはおかない。それが道德だ、治安だ。裁くといふことは聖なることだ。公明だ――。

古川は、ツと立つて庭園に出た

夥しく鈴のやうに梢にぶらさがつた簀蟲が忌々しく目につく。彼にも彼の生命があり、生活があると思ふけれど、愛樹の芽を悉く喰ひつくされて枯らされては、我慢がならない。

物干竿をとつてなぐつて見るが揺れるだけで一つも落ちない。

古川は植木鋏を出して来た。八方に張つた梅の木の小枝をざくざくと切り落すと、鈴生の簀蟲が喰ついたまゝ、忽ち山のやうにかたまつた。

古川はマツチを摺つて火をつけて見たが、燃えない。書齋へ飛びこんで、スクラップ、ブックを抱へて出ると、バラ／＼と擴げて、又マツチを摺つた。古くなつたザラ紙のブックはよく燃えた。淡い煙と火焰をあげて、簀蟲もその火の中へ五疋十疋二十疋と焼きこまれて行つた。

古川はさらに残りのブックの幾十冊かを運び出した。

x

x

x

x

x

x

「小父さん、僕たち夫婦が小父さんのお顔を早く見るやうなことがあれば、僕たちは失敗です。先づ十年計畫です。是非とも小父さんは健康で長命を保つて下さい」

これが第二信であつた。

「とにかく基礎を据えることができました」

これが第三信であつた。

「鯨子の北方國境における勇敢なモンペ姿を見て下さい」

これが第四信で、寫真が入れてあつた。

x

x

x

x

x

x

銀平は「饒舌るばかりではいけない。自信と經驗を活さなければ」と、スクラップ、ブックを灰にしてかためた怪しげなソクラテスの塑像をじつと見ながら、考へこんでゐるところへ、交渉が来た。

銀平は新體制の地方のある組織の中の主要な一員として選出され、昂然として、防空訓練の時に作った國民服を着て、初會合に出かけて行つた。

「これからが、新生活の第一歩だ。七十？。だが、まだ元氣だぞ！」

若山夫婦に、何うしても十年後には會はなければならぬ。アレダケ話したことが遺誠になつてしまつては、俺もだめだ。と思つたが、一抹の悔ひと寂しさがないでもなかつた。俺は少し喋舌り過ぎたかなとも思つた。また言ひ足りなかつたかなとも思つた。(おはり)

二四、寸感雜筆

▽ 規律とか統制とかいふものはベルリンの街に一步踏み入れると直にハッキリ分る。

▽ 何もかもが一糸亂れず、整然としてゐる。ヒットラーが頭角を現はすやうになつてから、初めてさうなつたのではない。

▽ イタリーはムソリーニが出てから、だんだんさういふ風にした。十六七年来のことである。

▽ ドイツの料理は合理的で辛辣に辛い情味があり、フランスは贅澤と洒落氣が多くて實意がなく、イギリスは輕薄で温か味も情味もなく水臭い。國風をよく示してゐる。

蝸牛を食つたり、蛙の足を食つたりアルプスの雪解の水に舌鼓を打つたり、それで戦さに敗けてをれば、フランスも他人に小言はいはれない。

ふと見上げた楯間にミレーの落穂拾ひがかゝつてゐる。農民は、何も知らずに、静かなのだらうかと思ふ。

朝寝、宵ツ張りのパリは、今どんな悲しい目にあつてゐるか。日本の青年に、朝寝、宵張りは一人もないか。

ハイドパークのピクトリヤ女皇の、あの記念碑に彫りつけた世界中の藝術家の彫像、カナダへ運びやうもあるまい。

エヂンバラのモニュメントの中でスコットは、爆音を聞いて「湖上の美人」時代を追想してゐる譯である。

ランカシヤの商店街に日本製のワイシャツが賣られたりしてゐたんだから、大戦後貿易に日本はもつと深刻な考慮をする必要があつたんだ。

ロンドンのピカデリーのショー・ウインドーの前に、夜になると立つてゐた名譽でもない多くの女。今はガスマスクでも持つて、どの邊をうろついてゐるか。

「降参が済むと一度にひだるがり」目の前にイギリスの姿が見えるやうだ。

同じ一枚で、十倍もの價值を持つた磅がとても糞だつた。マークは一枚で二枚、とても嬉しかつた。十五年も前の、現地での古い話だ。

フランの紙幣の、もろく破れ易かつたこと。今思ふと、國の運命を象徴してゐたともいへる。

▽ 一弗も十弗も同じ型の紙幣だ。モンローは朦朧として紛らほしいといふことなんだ。

▽ ニューヨークの百貨店の賣子に絹の黒染大紋付、襟に火の用心と赤染抜きにしたハツピを着せるやうなことをして、日本の絹を賣るのはいやだなアと思つた。

▽ 外米の粥をすゝりながら「お母アちゃんの金の帯締おびぢがこれになつたんだツてね」と子供は賢

▽ 小言をいつて食ふ時と、賞めて食ふ時と、同じものでも味が違ふ。外米の連用で、この貴い経験が、誰にも分つて來た。

▽ 豊作と聞くと、直に造石運動だ。それほど酒テよいものか。甘黨は砂糖がなくても、狂者のやうに瓶あさはしない。

▽ でも道ばたの蓬が伸び切つてゐる。砂糖が足らぬからだ、思つたりする淋しさは、左り黨には分らぬ淋しさだ。

△ 一碗の水、ぐつと呑めば、凡ての物慾を拂拭してくれる。

▽ 豆焦しといへばいゝに、滿洲コーヒといふから、不味いとツイ口が迂る。

▽ 何か栄養分を持つてゐさうなものだ。牛でも馬でも、これで肥えてゐると、雜草の根を掘つて洗つてちつと眺める。

▽ 黒褐色をしてゐるから醬油には違ひない、酸いやうに思はれるから酎には違ひない。

▽ 通帳にする紙が乏しくなつたので仲間が申合はせましてと、出入の八百屋が、三品、五品、總締にして一本につけだした。闇にかゝらぬ拔道を考へたのでなければ、それでもよいと思つ

てゐると豚箱入りをした。

▽ 胡瓜も芽をつまぬと仇花ばかり咲いて、生らぬ。子供も自由に伸ばしておくに役に立つ大人にならぬ。

▽ 代用食が、まだ研究の初歩で、へんどん喰ひにならねばよろしいがと、臺所の隅からいふ、餅や團子をふれまつても飯の量が減らぬことを、丁稚や女中を使ふ永い實驗で、商家の女房はよく知つてゐるのだ。

▽ 最高遊興費がきまらうとして資料の蒐集が始まつてゐるといふ話があつた。その資料の樞軸が概ね堂々の紳士だつたら面目なことだ。

▽ 一流どころといはれる茶屋、いつそやめさして布教所にも使つたら、罪障消滅になる。

▽ 栄養劑、精力劑の旺盛時代、何を暗示すると思ふ？

▽ 健康でさへあれば、薬の品質の落ちたことも、乏しいことも、愚圖々々いふことはない。

▽ 山の中腹を切り開いて、家を建て、自動車道路をS字の連続につけて、下界を睥睨してゐると、ガソリンの一滴も貰へなくなつて、炎天にも寒天にも腰の曲つた長者が、うん、うんと、息を切らしながら、登つて行く。壯なりとは見えぬ。

▽ 阪神の富豪の別邸には、井戸一つ掘つて二分の一馬力位のモーターをかけたたら、電力料月十圓まで、濟むと思ふのに、眞夏に乏しい水道の水を廣い庭園に撒きつゞけ月何百圓もの水道料を拂つてゐる智恵者が十指を折つても足らぬほどゐる。と新聞に出た。

▽ 半ズボンに、ニツカポツカでだんぶくろを背負つてゐないと、ハイキングとはいはぬらし。

▽ 古洋服を二着賣つて、新しいのが二着できた。着てはゐるが、何うにも合點が行かない。

▽ ズボンの下の下駄は、三日天下だつたのか。飽いてはならない。

▽ 炭、炭といふ。雑木林でも裸にしたら元にするに十五六年はかゝる。

▽ 木を生ひ立たせない草山は堆肥資料の製産地だ。それに植林を強ひると堆肥がなくなつて金肥になる。その金肥も手廻らぬまゝ米の増産は、農民たちの苦勞、容易でない。

▽ 男も丸刈り、不精髻になる勇氣がなければ、電髪に文句はいへなかつたのだ。

▽ 自ら緘るネクタイに、憂身をやつすのも妙なものではある。一度和服を着て、つけて見ると分る。

▽ 皆が、こんな贅澤なものを拵へて、毎日乗つてるんだと郊外電車の中で、よく思ふ。

▽ 俵が人ごみの街中を走り出した。醫者が忙しいと思つてはいけない。交通復古だ。

▽ 塵芥箱から一ひらの紙を拾ひ出す人の姿が、とても貴く感じられて來た。賢い小犬はもう吠え立てない。

▽ 山を叩きあるいて、くたびれて歸つて來た男「大きなどんがらをしてけつかつて、マンガン一つ持つとらん、けしからん」と怒る。怒つて、寢て又叩きに出る。これで矢張り時の人だ。

▽ 天文家が、不連続線を、引つぱり直せるやうになつたらと。誰でもよくいふことだ。

▽ 幾十百の新聞の論説通りに何もかもなつて行つたら、いゝになア、と誰でもよくいふことだ。

▽ 實行の伴はないものを、昔は空證文といった。空證文をいくらでも出す青年があつては、水ばかり入れた機關車、前進、空轉の一つもしないことになる。

▽ 不正と不信の行爲で、幸福と安心を得たものは、ひとりもゐない。

▽ 不正の行爲は、辛苦して自分の生命に匏をかけてゐるのだ。不信の行爲は、ゆるゆると天壽に砥石をかけてゐるのだ。

▽ 享樂をけふと逐ひ、その夢きのふと去つて、お前の胸中に何が残つてゐる？。唯憂愁と苦悶のみではないか。

▽ 媚と諛ひで得た椅子は氷塊の上に坐してゐるよりも冷たく且つ危い。

▽ 媚び諛ひを權威と間違つたり、眞綿で首を締められてゐるのを柔かだねといつてゐる鈍感が相當多い。

▽ 中元と歳暮で、地位が得られ、商權が得られるなら、お盆と暮は面白い月だ。

▽ 田舎の村の魂であつた鎮守の小さいお社を「祭祀を忘れれば神の尊嚴を傷ける」といつて内務省が併合せしめた。三十餘年前の青年、今は白髪になつて、ぼつぼつ復古の話を聞き、嬉し涙にくれ、當年の悲しさ、それからの淋しさを泌々追懐してゐる。

▽ 希望がなくなると信仰もなくなるといふ、希望は何だと聞いたなら「さア」と首を傾けた。

▽ 街路樹のプラタナス、アカシヤ、八月の暑い最中に市の園丁が枝を伐つた。眞夏の木蔭のありがたさを思ひ知れといふにしては、氣が短かい。

身勝手なものと思ふ。ソコを通る時、打水をしてゐる少女までが、憎々しく感ぜられたりするものだ。

▽
潤滑油が高くなつて、工場の滑車のメタルが減り、電力の負荷が増す。目立たない相當の損害だ。

▽
これが今、何う役立つかと維新関係の著書三千、集めて積んで、じつ凝視める。涙が湧く。熱い涙が。

▽
蟲干に、いつの間にか溜つた愛蔵の幅物を、一抱へ、押入から出して吊つて見たら、皆な微だ、みな星だ。糞喰へと思つた。

▽
蟲よけの樟腦をつくる木にも青い芋蟲がわいて、葉を喰ひ荒す。自身は守り難いものである。

▽
繪をねだる、書をねだるものに、繪絹や畫仙紙のこと少しも分つてゐない。

▽
たまたま悪洒落の軽口なんか聞いても、ちつとも笑止しくなくなつた。

▽
「眞剣」はよいことだ。碁を打つてゐる間だけ入齒の煩を知らずにゐる。

▽
返事が来ぬと淋しい。それによく出し忘れる。

▽
退屈かといつたら、娯樂放送がねえ、とまだそんなことをいつてゐる。

▽
憎まれても、憎まれても、だん／＼勢力を張つて行く男がある。

▽
口で喧ましくいふ男に限つて、こそ／＼暗いところを歩いてゐる。

ボンと人の肩を叩いたりして、愛嬌をふりまくものに、大した信念は持つてゐない。

▽ 切角返事をしてゐるのに、ほかのことを問はれるほど、頼みにならぬことはない。だが問はれたのを好いチャンスにして、だら／＼饒舌られては堪らぬ。

▽ 氣の弱い男は、よく怒つて見せる。

▽ 己れの是は人の非、人の是は己れの非と、これが咬み分けられたら、素晴らしい。

▽ 意見を聞きたいと言ひながら、自分意見ばかりを吐いてゐる。

▽ 扉の外に咳きを聞くと、もうゾツとする。

▽ 扉をあけて這入つて見て、皆が神妙に静かにしてゐると思つたら、煙たがられてゐるんだと

思ふことだ。

▽ 泣言を口癖にいふ男に限つて、懐にいつも百圓札を忍ばせ、時々數へて見たりしてゐる。

▽ 豪傑笑ひをして見せる男ほど、小心で、神経質ときまつてゐる。

▽ 俯向いて物をいふ青年に、氣をゆるしてはならない。

▽ 人柄は、下駄を見ることだ。

▽ もうよい加減にと思はれる老人ほど、元氣で頑張る。

▽ 責任を人に負はせて澄してゐるやうでも、自分の悪いといふことだけは知つてゐる。

人を陥して、舌を出してゐて、自分も陥ちてしまう。

▽
エライ、と言はれることが、とても嬉しいのだ。

▽
そんなのに限つて、忠告をすると、真剣になつて、怒つて、仇をする。

▽
天地といふものは、自分のゐる部屋だけだと思つてゐる。

▽
良心と、積極とに勝つものはない

▽
新聞智識を、ニュースのやうに吹聴する男に限つて、何も知つてゐない。

▽
あれで子供の教育がよく出来る？と、いつも思ふ。

▽
あれで衆生済度がよく出来る？と、いつも思ふ。

▽
あの顔をした男が、あの綺麗な文章を、とよく思ふ。

▽
植木を、あちらへ移したり、こちらへ移したりしてゐる内に枯らしてしまつた。人もあまり
任地を動かしては、生長すまい。

▽
狭い閑地を掘り返して芋を植えたりしてゐる時、大きな道路が又一本つくといふやうな新聞
を見ると、ツイ止めやうかといふ氣になる。閑地を掘つても掘らんでも、道路のため良い田が
潰れる時には潰れるのだけだ。

▽
尺貫法とメートル法が、一層ごちゃごちゃになりかけた。

▽
モンベ姿で、女性といふものを見直す。大原女はよく働く。

二五、寫眞漫筆 蛇腹の線言

二八四

○ 愛宕、鞍馬、比叡、大峰、金刀比羅、高野、御嶽、秩父、羽黒、日光山——太郎坊、次郎坊、僧正坊と、それが寫眞界に數へきれぬほどあるので、光畫藝術は進み、光畫藝術は遅れる。

○ 舶來の、祿の高いのが、いよいよ閉門だ。將來御加増の望みは斷じてない。「痰つばを吐きすて、ゆく門の外」。

○ あれも足らぬ、これも足らぬと、頭と腕だけは足りてゐるつもりである。

○ フィルム飢饉に、ちよつと立つて笑つて下さいと、その煩しさが減つて、美しい嬢さんの公園散歩、樂になつた。

○ 他人と見違へるほど顔を塗り潰す寫眞を、もう出さなくてもいい時分だ。

○ 寫場の見本窓にある女の顔に、新時代的な強い迫力は丸で見られない。前世紀の人造人間が踊つてゐるやうだ。これで次の時代の強い子位が産めるといゝが。

○ 誇りと自信を持ち過ぎてゐる女に、寫眞を寫して贈つてやつたりはせぬことだ。無駄手間をして、彼女を悲しませて、凡そ引合はぬ條件が揃ひ過ぎてゐる。

○ 文章で藝術寫眞を生かさうとするやうになつた。それが本當かも知れない。でもまだ文章に辯疏があり、看破はできる。

○ あの、これが、といつて入選に驚く。そんなものである。

自分の入れた點と違つたものが抜かれても、黙つてゐてほめる。審査は辛いものである。

○ 審査員はけなすことを能く知つてゐる。その代り、ほめる言葉もよく知つてゐる。

○ 展覧會を見る度、ナニ糞おれも、と思ふが、次の展覧會に、またさう思ふ。

○ 營業寫眞のサイズと値段を統制する時が來ても、腕だけは統制のしやうがない。

○ 焼つけて、送るよ、送るよといつてから一年になる。その娘は嫁入してしまつた。

○ 現像室にふたり這入つて見る。心から、心が融け合ふものだ。

○ 一枚の美人畫が一萬圓に賣れたりする。それが無い寫眞は、神聖な藝術だ。

ドイツのアグファはすつかり工場を案内して、フィルムに銀液を塗つてゐる祕密工場まで見せてくれた。アメリカのイーストマンは乾板、印畫紙の包装作業の面白いところを丁寧に見せてから、クラブで飯を食はして「もう閉場時間が來たから」左様ならといつた。

○ ドバーの税關で、ベルリンで買つた寫眞機を、なんのかんのと捻くり廻して、五ポンドの保證金を取られ、ロンドン行きの特急列車に乗り遅れてしまつた日の、忌々しさを、今新しく思ひ出す。

○ デフォルメーション、シエドウ、ハイライト、オーバー、キャッチ……いつ日本語で呼ばれるやうになるか。

○ 蚊の一生、蠅の一生、蜂の一生を文化映畫に見て、急に可愛くなり、血を吸はせたり、茶碗を舐めさせたり、まではよかつたが、蜂の頭を撫で、刺れてから、また憎らしくなつてしまつた、と。生物への同情はお寺の和尚さんに頼んでおく外なさうだ。

○ アメリカ映畫の進出はユダヤ財閥が經濟的に世界征服をたくらんでゐた仕事だといつたのは十五年も前の話だ。そんな馬鹿なことがと嗤つて、スクリーンに夢と消え去る女優を、涎を垂らしながら見てゐた若人も、ドイツが禁止すると聞いて、成程といひ始めた此頃である。

○ 日本固有の良俗を破り、頬に赤痣、頭に雀の巢、眉に絲を引かせたのは、何の感化だ!?

○ セツトと知らず、ハリウツドの野外撮影場を見學に行つて「コーヒを吞ませ」と勢ひよく飛びこんだ男がある。誰でもない……むろん筆者でもない。

○ 紅毛の姿は、焦點グラスに映る通り逆さまに見てゐないとヒドい目に逢ふ。

○ 汽車の窓から、ア、降りたいなと、何度も思ふ。一度、次の驛で降りて、三キロも戻つて見たが、何所だつたらうと思ふほど變つてもなかつた。

○ 戦時寫眞に見た獨逸兵の顔の、憎らしいほど愛嬌があつて逞ましいではないか、どれもこれも。

○ イギリスの、あらゆる市街が、ローマの廢墟と同じになつてしまつた。歴史は長いやうでもあり短かいやうでもある。

○ 茶屋長といふ幕府の御用人が奢りに長じ脇差の拵らへを立派にしてゐた。ある式日に登城した時、執政の酒井忠世が呼んで、その拵へを賞め一寸見せてくれと拔見を返し鞘を奥の方へ持つて行つてしまつた。

○ 式日のことゝて出仕の面々が袴き合ふ。いくら待つても忠世は出て來ず、茶屋は拔身の處置に困り十徳の袖に隠して廣間の隅に蹲つてゐたが、尖先がキラ／＼光つて目に立つ、人々が怪しさに目を向ける。

○ 譯を話し鞘を返して貰ふやう交渉を頼むが、誰も相手にしてくれぬ。その内に時刻が過ぎて、一人一人退城する。とうとうお目附役に縫つて、やつと思ひで返して貰ひ、歸るには歸つたが、思はぬ苦しい目にあつて、言外の戒めであることを悟り、その夜木刀を求め普通の拵らへにして、以後一切の奢りをやめたといふ話がある。

○ この話を知つてのことか否か、ある老人の許へ友達の息子が来て買ひ立ての高級カメラの説明をしてから二三枚寫した。老人は「便利な機械、高い筈ぢや。一寸貸してくれ」と速寫ケースだけを返して、フラーと外に出たまゝ、いくら待つても歸つて來ない。

○ 息子は半月あまり、中味のないケースを抱いて、友達が撮影の誘ひに來ても行けず、老人の行方ばかり尋ねてゐると、葉書が來て「ゆつくり湯治しながらあちらこちら寫してゐたが、素人の悲しさ工合が悪くなつて、もう使へぬ、小包で、お返しする」そして、「これがお詫のしるし」と五圓の小爲替が二枚入れてあつた。

○ 息子は、しかし、その時絶望はしなかつた。何か知ら教へられた氣持になつて、その十圓に幾らか足し、國産の安カメラを買つてケースの殻を埋め、何の氣兼ねもなしに、八方を寫し廻つてゐる。最近の實話の一つである。

○ せつかく現寸撮りにした寫眞の上を彩ればよからうと思ふのに、またソロ／＼と繪筆に寫し直す法隆寺の壁畫である。

○ 今日の姿を千年の後に傳へるに畫がよいか、寫眞がよいか、千年の後蓋をあけて見る人の氣持になつて見れば、ハッキリ分ることだ。寫眞よりも畫を貴しとする思想がいつになつたら轉向するのか。努力がいる。

二六、藝術寫眞と新體制

Ⅱ 國家意識民族意識の昂揚 Ⅱ

「あらゆる文化の魁けをなすものである、天文も、醫學も、機械科學も、動植物學も、出版印刷も、寫眞をはなれての發達はあり得ない」といふ優越感を以て、今日まで活潑な歩みを續けて來た寫眞が、非常時局だからとて、遽かに畏縮したり閉息したりすることはない筈である。けれど凡てのものが新體制の組織の中に新しい行進の道を拓いて行かうとするとき、寫眞ひとりが舊態勢のまゝ自由な行動を取り得るものでないことは今更説明する必要もなからう。

我々同好が長いこと唱へて來た「藝術寫眞」の如き、決して末梢的、小乘的、限局的なものではない。最初は繪畫の領域を侵し、或はこれに倣ひ或はこれを凌ぐといつた風のを「藝術寫眞」と呼んだのであり、科學寫眞、記録寫眞、復生寫眞、營業寫眞等から自然に分類され

て來たものではあつたが、日を重ね年を経るに隨つて思想上に變化を來し、技術の進歩も著しくなつて、第一個々の魂に洗鍊をうけてから、やがてこれを廣く衆人の上に互に感傳せしめ、全體的に寫眞といふものゝ使命の重要性を眞劍になつて考へるやうになつた。そして色々に分類された寫眞の部門の凡てから「藝術寫眞」といふ一部門が獨立してゐるといふ小乘的な考へはいつの間にか解消されて、あらゆる寫眞が純潔な性格と至高至上の姿態を有する限り悉く藝術寫眞であると考へるやうになつた。

これは一部門と考へられてゐた「藝術寫眞」が狭い境地から逸脱して、急に寛容な態度、或は併呑的な態度を示すやうになつたといふのではなく、もつと大きな、言はゞ全體的な態度にまで考へ方が進んで來たのであつて、即ち至上の藝術を離れての寫眞は生命がない。脈打つやうな生命、純潔にして正しい魂をもつてをるものであれば、これまで何と呼ばれてゐた部門であらうとも、悉く「藝術寫眞」であると思ふやうになつて來たのである。

以上のことを違つた角度からの繰返しになるが、寫眞といふものゝ發明から發達。「藝術寫眞」といふ稱呼が生れたまでの過去を靜かにふりかへつて見ると、最初は人物(肖像)寫眞であり、次が風景寫眞であつて、兩者とも記録的な性格を持つに過ぎないものであつたが、だん

く技術や思想が進むにつれて、以上の二者から「藝術寫眞」と呼ぶ特異なものが生れ出た。しかもそれは寫眞といふものゝ本質を深く、掘りさげて考へて見てからの仕事でない、軽い遊技的な、語を換へていへば高尚な氣紛れから、主としてアマチュアにより醸成されたもので、人物にしても風景にしても唯忠實に寫生し記録してゐるだけでは動きがなく生命の躍動がなく自然興味が感ぜられなくなつたところから、ぼつ／＼試みられた、正直にいへば傳統に養はれた繪畫觀が、寫眞の上に徐々に働きかけて來たのが即ち「藝術寫眞」であつたのである。けれど發生、進歩の歴史が何うあらうと今更その跡を事細かに討ねて茲に詳敘する必要はなからう。政治の新體制についても過去は語らぬといふことで進んで來た。我が「藝術寫眞」も新體制に即應するには即應するだけの精神的準備をなさねばならず、またその必要が相當痛切に必至的に迫つて來てゐるので、先づ第一に國家意識、民族意識をその基調にしつかり据えておかねばならぬと思ふ。さうでなければこの上の力強い發展は望めない。

「藝術寫眞」が國家の新體制に即應するといつても俱樂部や會を合同したり、單なる國家の宣傳の一部の役目を果すといふやうなことでその全使命が果せるものと思つてはならないだらう。勿論防牒と關聯して細心の注意を必要とし、また奢禁の主旨を思はないで必要でもないの

に高價な機械を肩にして衆人環視の中を歩いたり撮したりするやうなことは十分慎まねばならぬが、そんなことだけで新體制順應を云々して安心したり澄したりしてはゐられない。新體制は精神において決して消極を意味するものでなく、積極を意味するものと私は信ずる。

日本における「藝術寫眞」の今日までの弱味は、小器用な腕に任せて外國の作品に少しの新味でも發見すれば忽ちこれを眞似て見たり、前衛派、未來派、象徴主義、寫實主義といろ／＼な流派が繪畫の中から生れて來ると「寫眞は繪畫とは全く別だ」といひながらこれが寫眞への移植を試みることは比較的敏感であつたが、國家意識、民族意識を強く盛りあげやうとして偶々努力するものがあつても、移り變りの激しい目先だけが新奇に見える外國の傾向に絶えず禍されて、古典的であるとか、新鮮味に乏しいとかいつて一概に斥ける風のあつたことは否まれぬ事實であらう。

美の探求に思ひをひそめ、光りと寫眞の本質を究めるについても傾聴に價するいろ／＼の説は出たが煎じつめて見れば末枝の問題以上を出でず、議論づける根本に、國家意識、民族意識がしかと据えられてゐなかつた憾み少しとしない。藤田東湖先生の正氣の歌に「天地正大の氣、粹然として神州に鍾る、秀で、不二嶽となり、巍々千秋に聳え、注いでは大瀛の水とな

り、洋々として八州を環る。發しては萬葉の櫻となり、衆芳與に儔にし難し、凝つては百鍊の鐵となり、銳利整斷つべし、蓋臣皆な熊羆、武夫盡く好仇、神州孰か君臨す、萬古天皇を仰ぐ、皇風六合に浴く、明德太陽に俾し」とあり、我々が何をなすにも根本をなすものはこの心、この魂でなければならぬ。時變下一齊に敬虔な氣持で謡はれてゐる愛國行進曲も恐らくはこの正氣歌の持つ精神を基調にして生れ出たものであらう。本居宣長翁は「民安く世を度會の五十鈴川その水上の深き恵みに」と詠ぜられた。皇祖の深きみ恵に浴して世界に雄飛する大和民族としての強い歡びと矜りを寸時も忘れてはならぬ我々である。「藝術寫眞」の使命が重要性を帯ぶることを知れば知るほど、この根本の魂から少しでも離脱するやうなことがあつてはならない。これは必ずしも今日に限つて言はれることではないが、今日においては更に一層強調せねばならぬことである。

日本の國家意識、大和民族、東亞民族の意識を「藝術寫眞」の上にかに表現するか？。この説明は容易である。私はこれまでも屢次いつたことであるが、今一つの山、一つの川、一つの建物、一本の樹木、一個の巖、一人の人間、一羽の鳥、一疋の獸を被寫體として、これに對した時、彼等の持つ姿をそのまま、正しく再現したといふだけでは單なる一個の記録寫眞を

作るに止まり、繪畫よりも正確で迅速だといふ以外に大した意味を持つとは思はれない。また山川草木何に限らずその視角は殆ど無際限であつて、極めて大ざつばにいつても前後左右天地を第一として最少限數十百に分け得る斜角面があり、その斜角面を凝視して殊更變化を求めため、できるだけ不思議と見える部分を選び、前人未踏の地を切り拓いたやうに思ひ、第三者が見て不可解となすやうなものを作りあげる傾向は今なほ相當の勢力を持つてをり、色々斷片的な物體を組み合せ、光線の屈折を利用して奇妙な像影を作りあげ、これに難解な説明を附して思想感情の表現なりとする種の流派もまだ相當にある。けれどさうしたものに必ずしも強い國家意識、民族意識が盛られてゐるとは思はれない。我等の持つ魂はもつと高い強いものだ、もつと純潔至上のものだ、どんな場合でも物を歪めて見て常に目に馴れぬ畸形を歡ぶやうな他愛のないものではない。我等の思慮と凝視によつて魂の底から生れ出る印畫は山であり川であり家であり木であつても、單なる山や川や家や木でなく、我等の生々とした魂を抱いて生れた山であり川であり家であり木でなければならぬ。ソコに模倣や、遊戯や、氣まぐれや、衝氣が少しでも潜んでをれば、いかに綺麗に美しく不思議なものに作畫されてゐても、眞の魂の躍動がなく、生命がなくツイこの間まで幅を利かしてゐた蠟人形に暴ばれ廻したやうな新意匠の着

物を着せた百貨店の飾り物と毫も變りないものを見るに過ぎないことにならう。

不幸にして斯うした主張は、小手先の技工のあまりに巧妙なことや、時流を逐ふ假裝の新主義などに言ひ負かされて今日まで餘り著しい芽は吹かなかつた。けれど凡てが新體制によつて組織的に新らしい道を行んで行かねばならぬとする今日、文化の最尖端を行く「藝術寫眞」がその新組織の歩みに一步でも遅れるやうなことがあつてはならない。我等は「藝術寫眞」に強い日本の國家意識、大和民族、東亞民族の意識を織りこんで、新體制の魁けに、奉公報國の道を盡すといふ覺悟がある。我等には熾烈な國家意識、民族意識がある。この意識の上に立つて燃ゆるやうな情熱を印畫紙の上に表現することに懸命の努力を拂ひ、團體的に一系亂れぬ行動をとるやうになれば、どれだけ新興隆の途にある國家に貢献するか分らないと思ふ。強い精力の盛り上つたやうな均整のとれた男性的な肖像印畫に對して健康日本の心強さを思ふとか、優雅にして且つ逞ましい女性の肖像を見て次の日本の民族の繁榮を想像するといふやうな即感的な事象だけ拾つて見ても決して少い數ではない。九州櫻島の大爆發でこの世の終末を思つてゐた麓兒島地方の人々が地震學の泰斗大森博士來着の姿を驛頭に見たゞけでスツカリ安堵し鎮靜した事實を知る私は、關東大震災の時にも必ずや同じ思ひを経験された人々が多かつたらうと

思ふ。明治維新の當初西園寺公がまだ十七歳の若さを以て、徳川勢を賊軍として討伐すべしと叫んだ一語に忽ち廟議決してこの大業のめざましい一轉機が生れた歴史を顧みて、時艱克服を必要とする大切な場合には區々たる一葉の印畫にも強い國家意識の表現があつて、どんな好ましい事象が生れる機會がないとは斷言出來ないと思ふ。その代り國民の氣風を懦弱にし、意志を薄弱にするやうなものが作られたりすることは斷じて排斥せねばならぬ。

とかく足並の揃ひかねる時代には強い一人の先覺者が大切である。新體制への首途の足揃ひ揃ひ切つてゐるとはいはれぬ今日一人の先覺者があつて立派な歩みを見せてくれればこの道に樂しみと憂ひを等しうするほどのもの、頓てその足跡を踏むに躊躇するやうなことはあるまい。橋田文相の話にもあつたやうに新體制といふことは合同組織をなすといふ如き意味のものゝみではない。これまでの言葉にして矛盾を感じるものは今日に棄て、新體制の眞の精神をシツカリ把握し、強い日本の國家意識、大和民族、東亞民族意識の表現、而して八紘一字の大理想表現の覺悟のもとに、堂々躍進すべきであらうと思ふ。

昭和十六年二月十五日印刷
昭和十六年二月二十日發行

人生三世紀相
定價壹圓五拾錢

著者 大江素天

發行者 京都市河原町蛸藥師下ル
河原武四郎

印刷者 京都市柳馬場三條下ル 似玉堂
福井松之助



不許複製

發行所

京都市中京區
河原町蛸藥師下

河原書店

電本局②六八四七番
振替 京都二一五八番
大阪五四三八八番

堂本印象著並裝釘

忽五版

看心有道

四六判 三百五十四頁
口繪原色 上製美本
コロタイプ挿入圖四十二
定價 二圓五十錢
Ⓢ 十 四 錢

京洛を中心に日本各地或は半島の名勝社寺を巡歴してそれ等のもつ美を優秀なる藝術家の心眼を通じて教示される。それ等は讀書子のみがもつ歡びであると同時に多數の挿入名畫は和やかに吾等の胸にせまる。或は佛畫壁畫を鑑賞し四季の草花を愛で或は食味、住居、和鏡、茶碗、歌切、茶室の繪に關する隨想等深く藝術家の心境に入ることが出来る。加之繪論、構圖論等の中篇は後進の必讀すべきものであらう。當代畫壇の王者印象畫伯の處女集編をお奨めする。

終



五